

出土遺物（弥生土器）

第VI章 権現谷第2遺跡

第1節 調査の結果

権現谷第2遺跡は前畠の台地と谷を隔てた北西に延びる舌状の台地に位置する。調査はこの中央部で実施し、調査面積は約1600m²に至った。

調査の結果、縄文時代早期の土器が出土したほか、時期不明の土坑を10基検出した。室内調査の段階で、後世の擾乱または風倒木と判断したものについては本報告において抹消したので、概要報告書とは内容が異なることを周知いただきたい。

遺構は長方形の土坑〔SC-03・05・06〕を除き、方形や円形でも不整形なものが大半である。いずれも遺物は出土していない。SC-05は覆土内に御池ボラとみられる火山灰を敷きつめたもので、土坑墓の可能性がある。八重地区内の遺跡においては宮田遺跡に同様の土坑があるほか、七野地区の長蔵遺跡でも数基発見されており今後も類例が増すものと思われる。長蔵遺跡の調査例では覆土の燃酸分析をおこなった結果、他の遺跡の土坑墓で摘出された数値の1/10にとどまり、墓であるという実証はできなかった。本報告では「御池ボラ」降下以降の土坑とすることにとどめておき、今後の調査で再度分析検討していきたい。

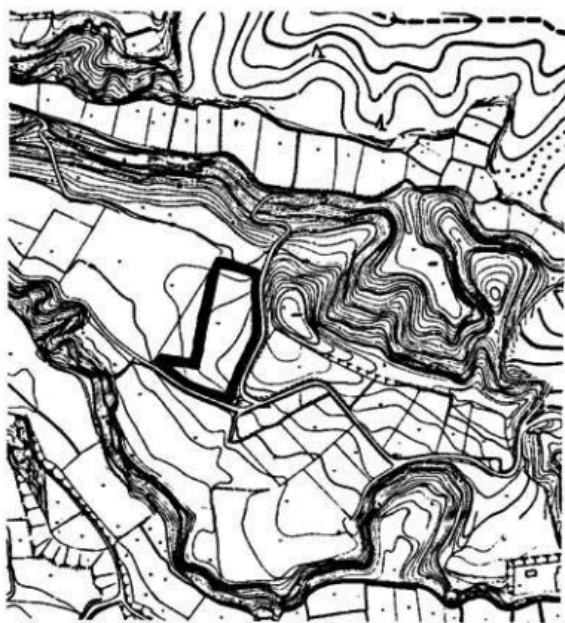
出土遺物は包含層が良好に残存していなかったこともあるが、極めて少量である。(1・2)は円筒形を呈する条痕文土器の胴部とみられる。(4)は条痕文土器の底部、(3)は楕円押型文土器である。その他、塞ノ神式系の撲糸文土器の細片がある。

第2節 まとめ

権現谷第2遺跡は縄文時代早期と、おそらく中期以降の複合遺跡であることを確認したが、調査区が遺跡の末端であったか或いは極めて短期間に放棄されたためか、遺跡の性格を的確に把握しうるデータは得られなかった。

〔参考文献〕

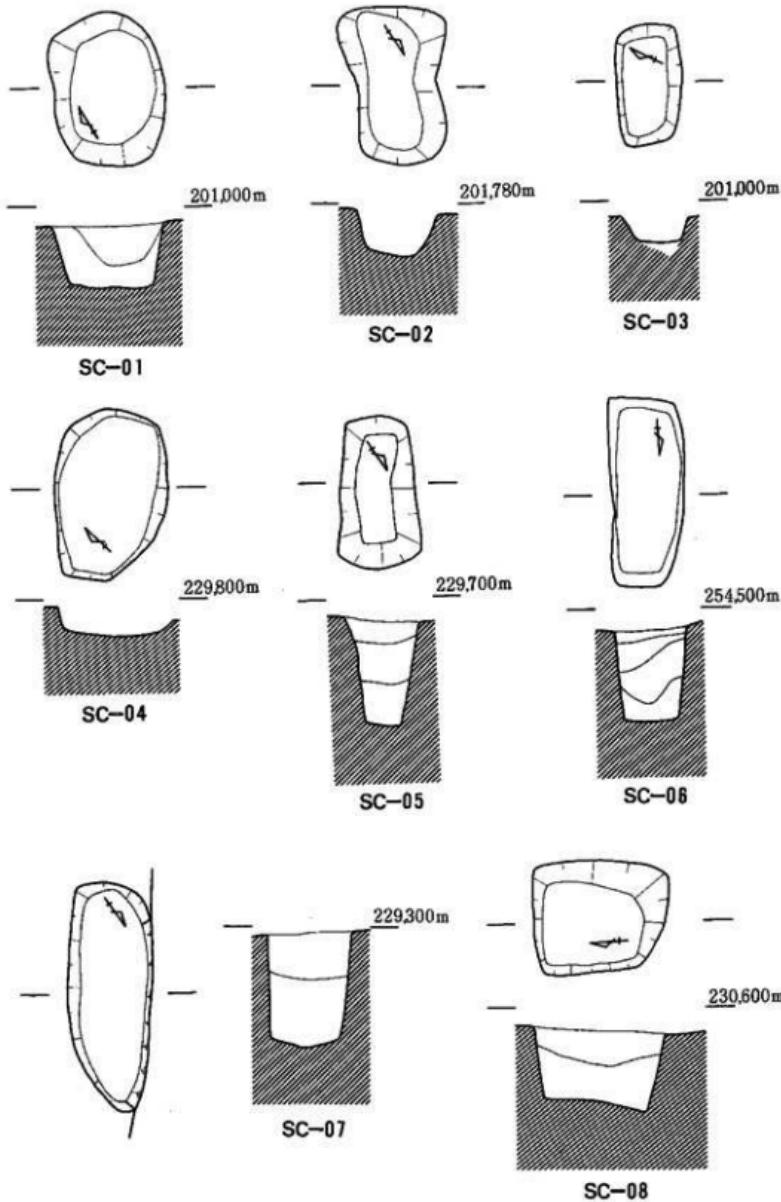
「長蔵遺跡」田野町文化財調査報告書第17集 田野町教育委員会 1994



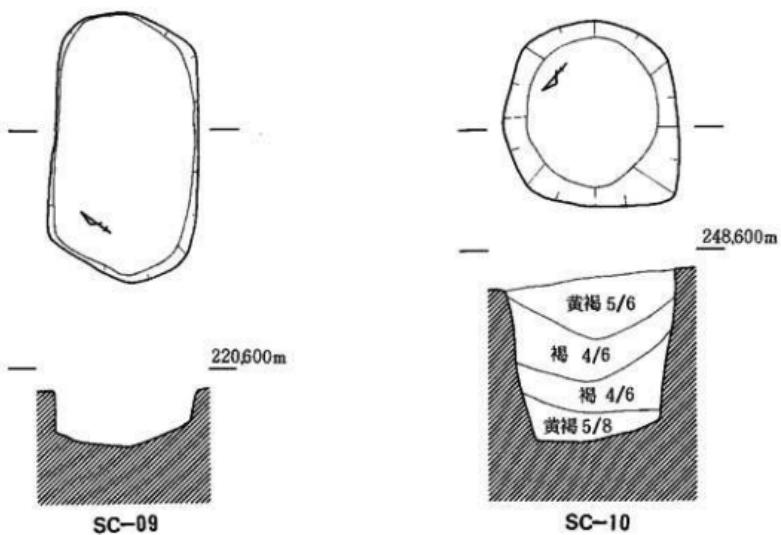
第63図 調査区周辺地形図



第64図 造構分布図



第65図 遺構実測図 (SC-01~08) S=1/40



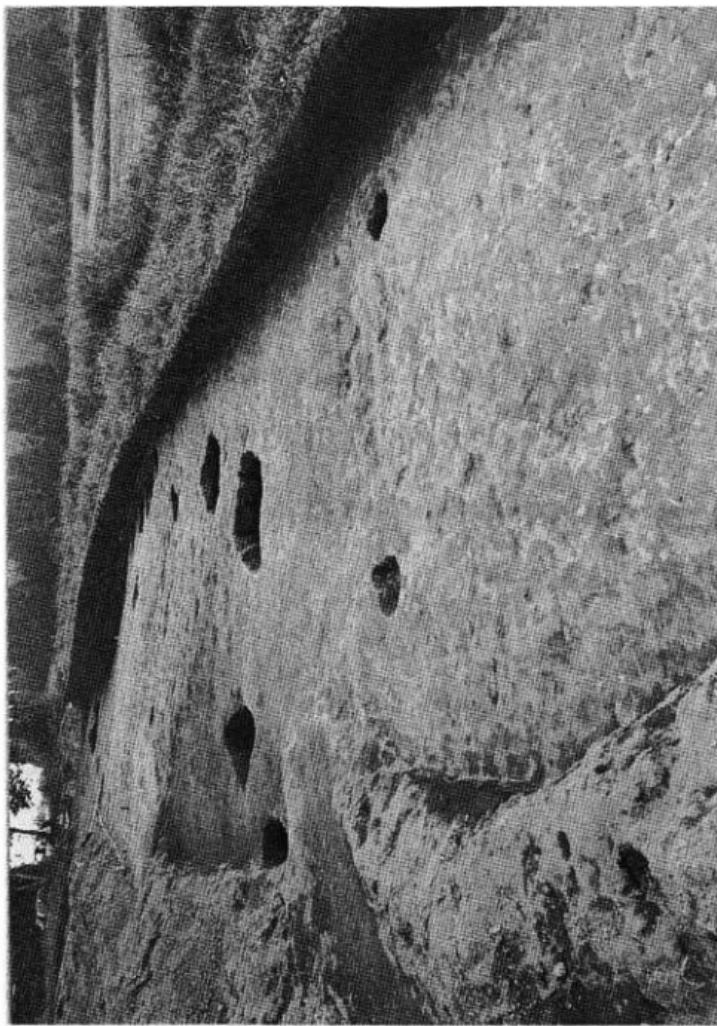
第66図 造構実測図 S = 1 / 40



第67図 造構実測図（縄文土器）S = 1 / 2



遺傳檢出狀況

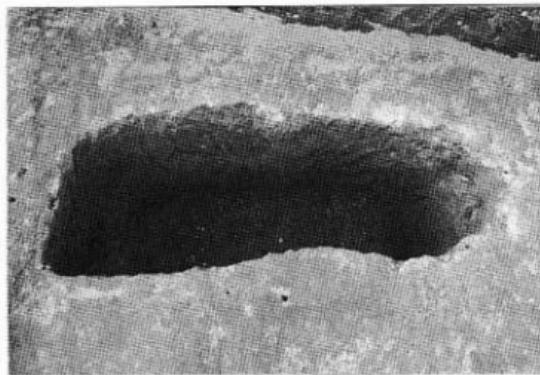


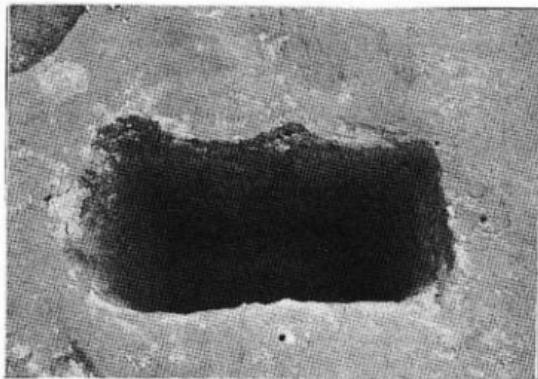


遺構検出状況

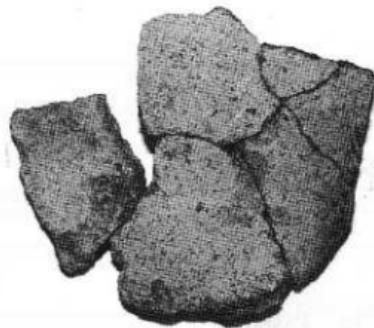


S C - 0 6





SC-05



出土遺物（繩文土器）



第VII章 宮田遺跡

第1節 調査の結果

宮田遺跡は砂田遺跡から西側へ深い谷地形を隔てた丘陵上に位置する。調査は丘陵縁辺の緩傾斜を開墾した畠地のうち約880m²を対象に実施した。

層位は上層から耕作土・赤ホヤ二次堆積・褐色土・黒色土（やや粘質）・明黄褐色土を基本とするが開墾による削平をかなり受けている。遺構検出は褐色土層を掘り下げ黒色土層を掘り下げ精査し、主に明黄褐色土の上面でおこなった。その結果、集石遺構を3基と土坑を9基検出した。遺物は縄文時代早期の土器片と石器が主に褐色土層と黒色土層内において出土したほか、耕作土層や赤ホヤ二次堆積層においても土器片等がみられた。

集石遺構〔SI-01～03〕は、いずれも疊が疎らな状態で分布し土坑を伴うもので、赤ホヤ堆積以前の層から検出された。おそらく縄文時代早期のものとみられる。〔SI-01〕の土坑内から条痕文土器（6）が、〔SI-01〕の土坑内から押型文土器（9）が出土した。

遺構番号	集石の規模	土坑の規模	深さ	疊の分布状態ほか
SI-01	——	180cm×185cm	40cm	4～40cmの疊が疎ら 土器(6)
SI-02	60cm×102cm	不明瞭な落込み	浅い	4～25cmの疊がやや疎ら
SI-03	擾乱により不明	不 明	10cm	4.5cm～16cm大の疊が疎ら 土器(9)

土坑〔SC-04～12〕の大半は耕作土直下または赤ホヤ二次堆積層直下で検出したものであるが、前記したように各層の擾乱が著しいことから、それぞれの埋没の時代・時期を明示することは避けたい〔SC-07〕の覆土内から条痕文土器（3）が出土した。〔SC-05・09〕については御池ボラとおもわれる火山灰が、敷きつめたような状態で見られる。長蔵遺跡や本報告中の権現谷第1遺跡の長方形土坑と同例である。

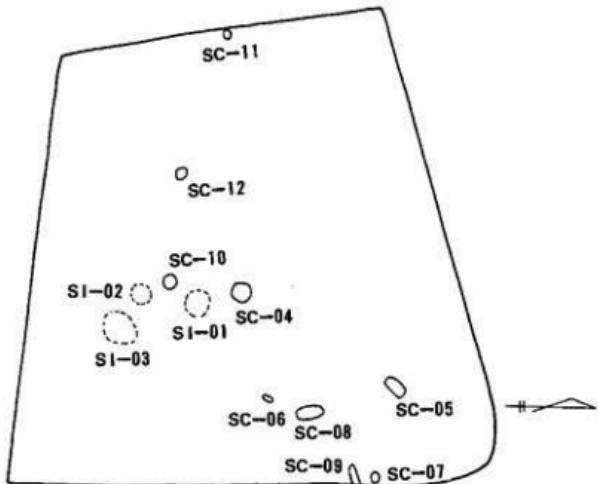
遺物は土器片が点、石錐が2点、剥片が7点（チャートが5点・黒曜石が1点）、叩石が2点、磨石が14点と石皿が1点出土した。

遺構番号	規 模	深 さ	形 状
SC-04	113×121cm	28cm	円 形
SC-05	56×135cm	54cm	長方形
SC-06	50× 85cm	20cm	橢円形
SC-07	55× 60cm	28cm	円 形
SC-08	84×185cm	64cm	長方形
SC-09	48× 94cm	70cm	長方形
SC-10	86×102cm	22cm	円 形
SC-11	80× 95cm	68cm	円 形
SC-12	78× 96cm	44cm	円 形

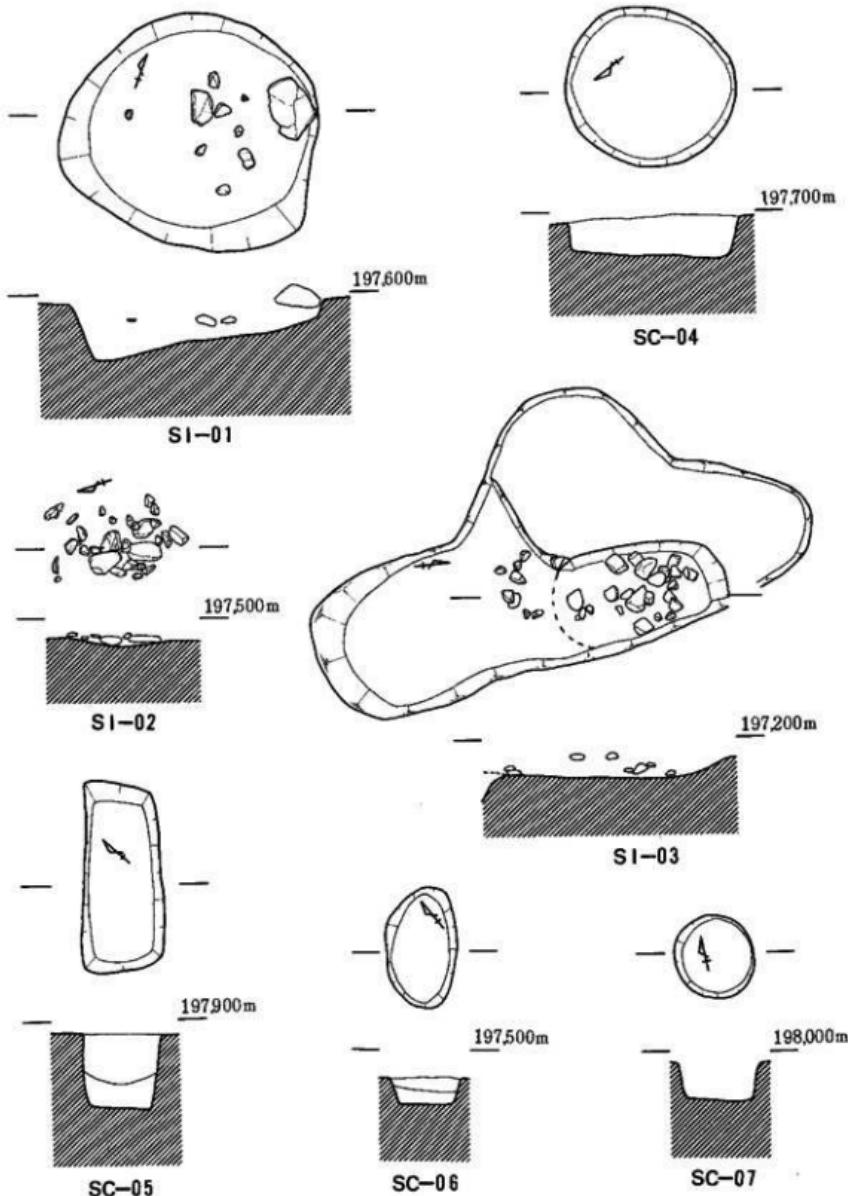
(1) は前平式土器で口唇部をほぼ平坦に仕上げ、そこに押圧文をめぐらせ、更にその直下に同文様を2条めぐらす。文様帶下には横位の丁寧な条痕文が見られる。(2~6・21) は条痕文土器で、いずれも斜位の荒い条痕を施す。(3・5) の口唇部はやや平坦な面をもつが(5) は口唇部及び内面をケズリにより丁寧に仕上げる。勿論荒い条痕の上から撚糸文を施す。(8~16) は押型文土器で(8~13) は山形文、(14~16) は楕円文である。縦走りの山形押型文を施す(10) は口縁部がやや内湾するので口唇部はほぼ平坦に仕上げる。(7) は縦文円筒土器で、細い原体をやや斜方向に施すもの。(17・18) は楕状の原体で縦位に波状の文様を施す桑ノ丸式で、口縁部内面はごく僅かに内湾し、端部は内側に削ってほぼ三角形の断面に仕上げる。(19) は撚糸文による文様帶をつくり沈線により無文帯とを画する塞ノ神式系である。(22) は凹線文を綾衫状に施す。薄手で焼成も堅緻で手向山式に相当するものか。(23) は尖底土器の底部である。文様帶等は見られない。

石器(24・25) はいずれも凹基無頸器でチャート製である。叩石や磨石の大半は赤変しており、集石遺構等に転用されたものとみられる。

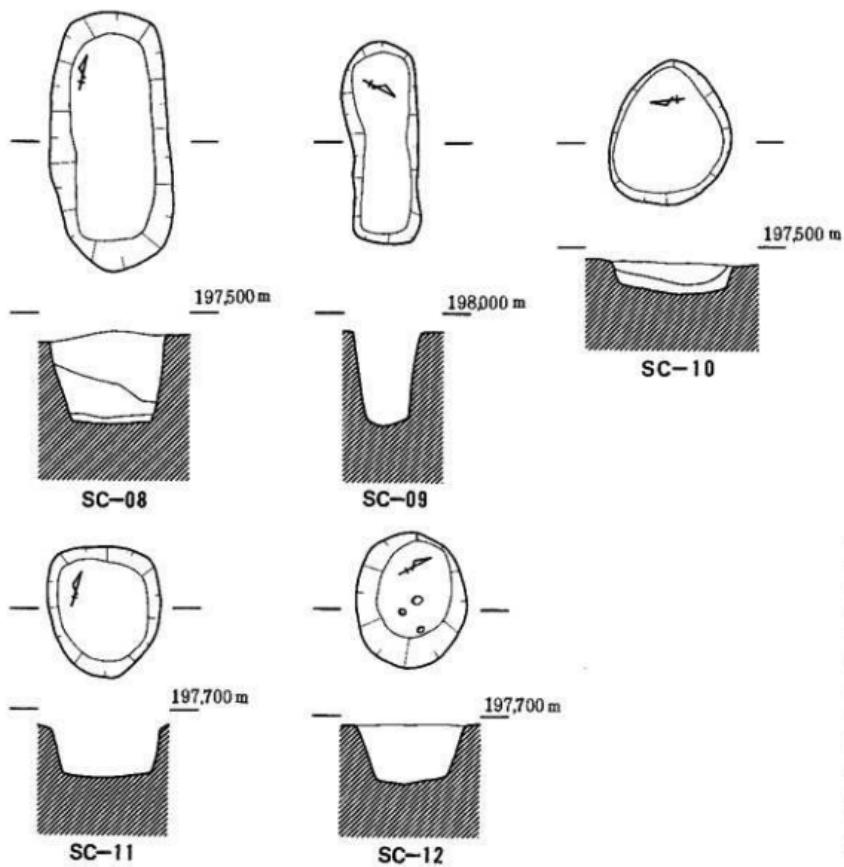
以上のとおり、宮田遺跡は縄文時代早期と中期以降の複合遺跡で、主に早期を中心となることを確認した。



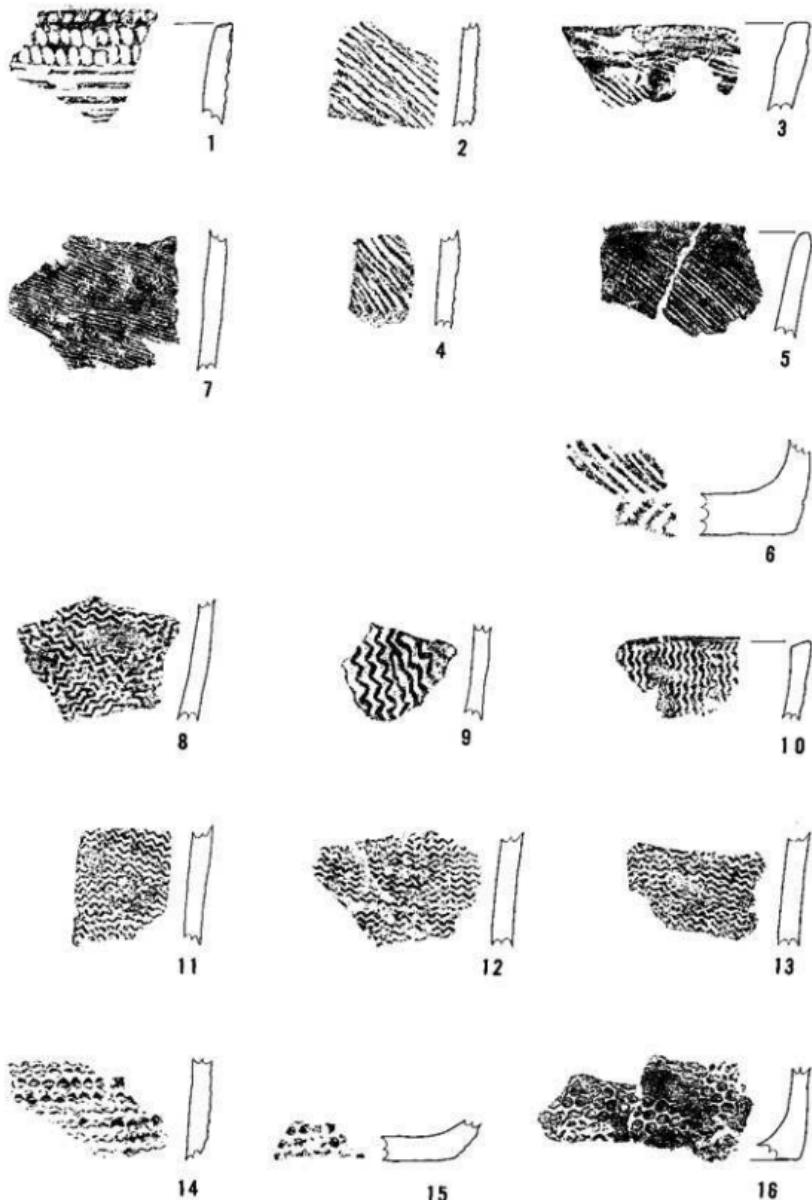
第68図 遺構分布図



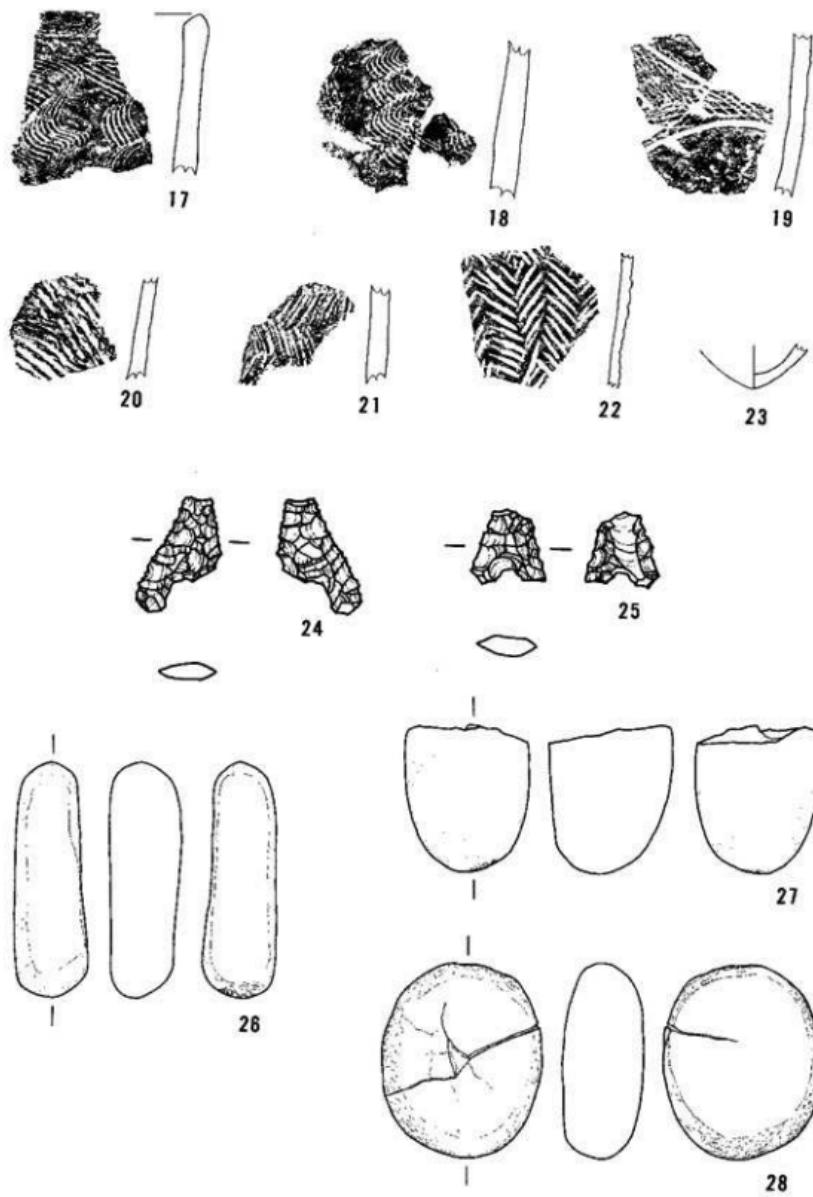
第69図 遺構実測図 (SI-01~03・SC-04~07) S=1/40



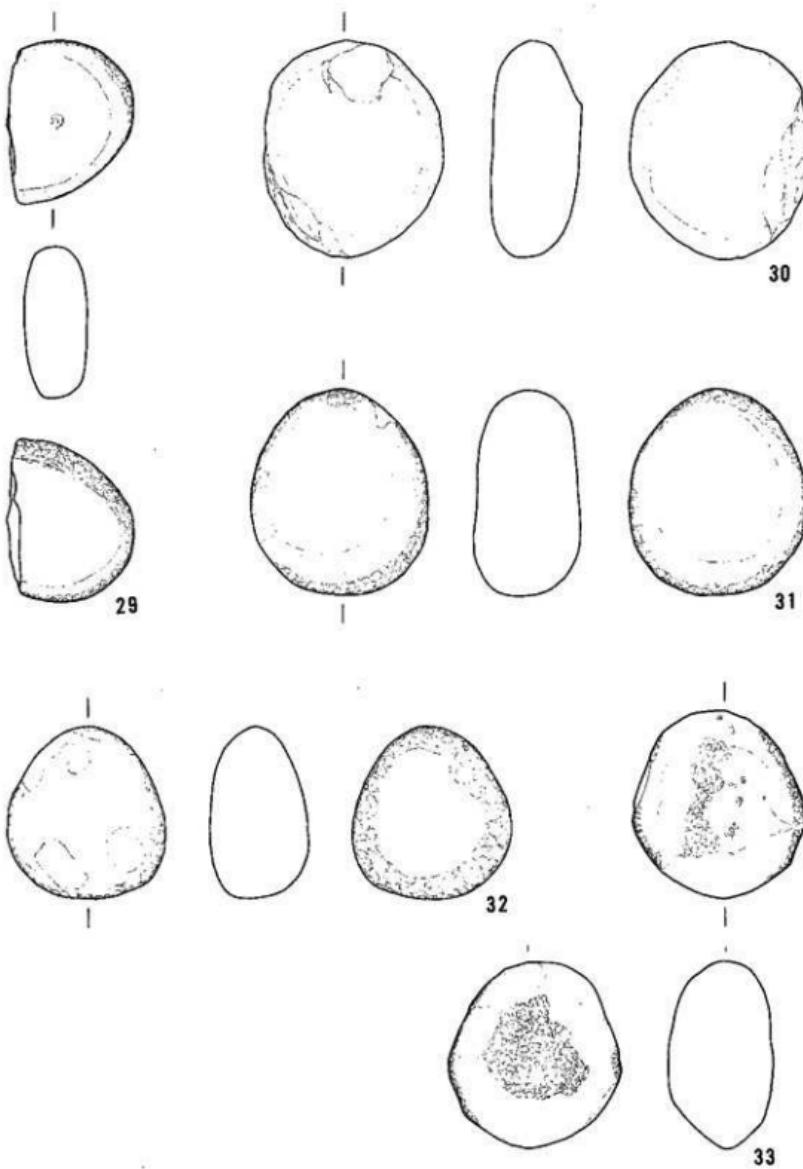
第70図 遺構実測図 (SC-08~12) S=1/40



第71図 造構実測図（縄文土器）S = 1 / 3



第72図 遺物実測図（縄文土器・石器）S = 1 / 3



第73図 遺物実測図（石器）S = 1 / 3

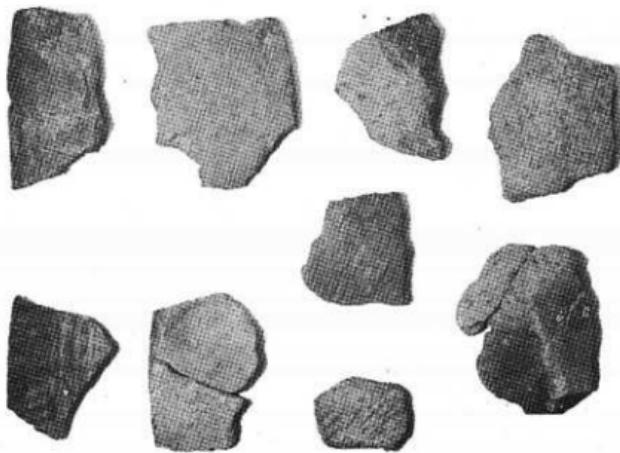
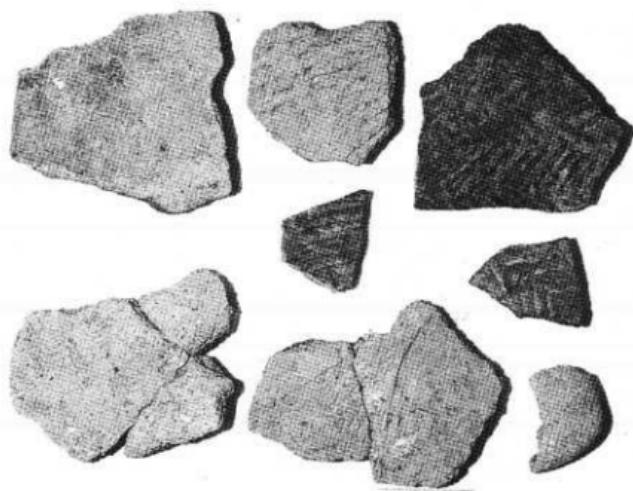


遺構検出状況

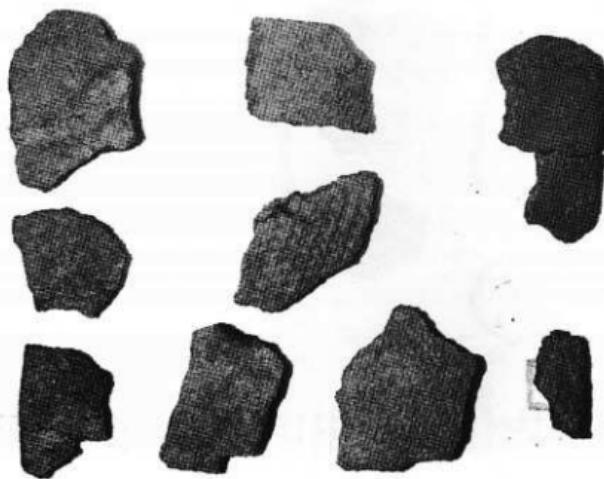


S I - 0 1 検出状況

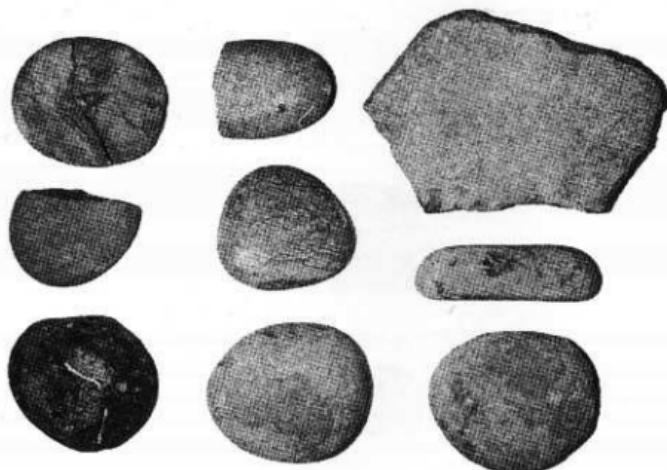
出土遺物（刻文土器）



出土遺物（繩文土器）



出土遺物（石器）



第VIII章 砂田遺跡

第1節 調査の概要

砂田遺跡は八重地区集落の南西から延びる舌状の台地上にあり、調査はこの先端部に位置する緩斜面で実施した。西方に宮田遺跡、東方に平成6年度調査予定の永迫第1遺跡を見渡す。調査の段階でA～F区の区域を設定したが、本文では一括して報告する。調査面積は全体で約4500m²に至った。

層位は上層から耕作土・赤ホヤ二次堆積・赤ホヤ堆積・黒褐色土（硬質のいわゆるカシワパン）・褐色土1・褐色2（灰褐色ブロック含む）を基本とする。褐色土1については明確な線引きはできなかったが、上層と下層に分けられる。

遺構は赤ホヤ面の更に上層から掘り込まれたとみられる縄文時代後期の土坑と、褐色土1層内の時期において使用されたとみられる縄文時代早期の集石遺構がある。

遺物は縄文時代草創期の土器と早期の土器や石器、土坑に伴う縄文時代後期の土器がある。大半は褐色土1層から出土した。また縄文時代後期の包含層は開墾による削平等により、完全に消滅している。



第74図 調査区周辺地形図

第2節 検出遺構

集石遺構が7基〔SI-01~07〕と土坑が20基〔SC-08~27〕検出された。集石遺構は検出層位及び出土遺物から、縄文時代早期のものと確認した。土坑底面に杭状のピットが2~7箇所見られる〔SC-16~20〕については〔SC-19〕から縄文時代後期の土器片(86・87)が出土しており、この時期に埋没したものであることを確認した。また〔SC-08〕からも同形式の土器片(84・85)が出土しており、他の土坑もこれらとほぼ同時期のものと推定される。

〔SI-01〕

約127cm×130cmの範囲に礫が密に分布する。105cm×118cmで深さ35cmの土坑を伴い土器片(32・55)が出土した。

〔SI-02〕

約100cm×190cmの範囲に礫が疎らに分布する。土坑を伴わない。土器片(54)が出土した。

〔SI-03〕

約100cm×160cmの範囲に礫が密に分布する。97cm×116cmで深さ30cmの土坑を伴う。〔SI-04〕

約50cm×70cmの範囲に礫がやや密に分布する。土坑を伴わない。

〔SI-05〕

約90cm×100cmの範囲に礫がやや密に分布する。ごく浅い土坑を伴う。

〔SI-06〕

約60cm×75cmの範囲に礫がやや疎らに分布する。土坑を伴わない。

〔SI-07〕

約75cm×90cmの範囲に礫が密に分布する。63cm×83cmで深さ15cmの土坑を伴う。

〔SC-08〕

116cm×132cm、深さ83cmのやや歪な円形を呈する。土器片(84・85)が出土した。

〔SC-09〕

141cm×203cm、深さ66cmのやや歪な梢円形を呈する。

〔SC-10〕

150cm×250cm、深さ90cmのやや歪な梢円形を呈する。

〔SC-11〕

114cm×162cm、深さ37cmのやや歪な方形を呈する。

〔SC-12〕



第75図 遺構分布図 S = 1/400

190cm×--cm、深さ60cmで正確なプランは不明。

[SC-13]

107cm×149cm、深さ39cmの歪なプランを呈する。

[SC-14]

104cm×175cm、深さ65cmのやや隅丸の長方形を呈する。

[SC-15]

85cm×110cm、深さ50cmのやや歪な円形を呈する。

[SC-16]

135cm×145cm、深さ125cmのやや歪な円形を呈する。底面に20cm×25cmで深さ34cmのピットと極小の杭穴とおもわれるピットを伴う。

[SC-17]

220cm×225cm、深さ157cmのやや歪な円形を呈する。底面に17cm×20cmで深さ40cmのピットと小ぶりの杭穴とおもわれるピットを6箇所伴う。

[SC-18]

177cm×181cm、深さ140cmのやや歪な円形を呈する。底面に23cm×27cmで深さ31cmのピットと23cm×24cmで深さ31cmのピットを伴う。

[SC-19]

170cm×200cm、深さ115cmのやや歪な円形を呈する。底面に24cm×26cmで深さ35cmのピットと23cm×24cmで深さ36cmのピット、極小の杭穴とおもわれるピットを伴う。土器片(86・87)が出土した。

[SC-20]

174cm×180cm、深さ140cmのやや歪な円形を呈する。底面に28cm×31cmで深さ32cmのピットと極小の杭穴とおもわれるピットを伴う。

[SC-21]

130cm×--cm、深さ52cmで正確なプランは不明。

[SC-22]

100cm×223cm、深さ85cmのやや隅丸の長方形を呈する。

[SC-23]

72cm×--cm、深さ22cmで正確なプランは不明。

[SC-24]

70cm×84cm、深さ20cmのやや歪な円形を呈する。

[SC-25]

84cm×86cm、深さ66cmのやや歪な円形を呈する。

〔SC-26〕

76cm×--cm、深さ38cmで正確なプランは不明。

〔SC-27〕

100cm×105cm、深さ28cmのやや歪な円形を呈する。

第3節 出土遺物

(2~6)は縄文時代草創期、(1・7~83)は縄文時代早期、(84~87)は縄文時代後期の遺物である。早期の土器には前平式、知覧式、下剥峰式、桑ノ丸式、手向山式、平格式、塞ノ神式のほか無文、押型文、条痕文や現段階では類例の見当たらない貝殻文土器などがある。(34・56・66・71・73・76・77・81・83)は黒褐色土、(1・5・7・10・11・16・19・27・31・33・35・36・38~41・43・44・49~52・57~65・67・70・72・74・75・78・80・82)は褐色土1から、(4・12・15・17・20・22・25・26・28~30・37・46・47)はその上層、(2・3・6・13・22)は同下層のそれぞれ掘り下げ及び精査の段階で出土した。(32・55)はSI-01、(54)はSI-02、(84・85)はSC-0、(68)はSC-0からの出土で、他は耕作土等の搅乱層より出土したものである。搅乱層より出土した石器については概ね早期であるが、これ以降のものも若干混入している可能性がある。

〔縄文時代草創期の土器〕(1~6)

いずれも爪形文土器で、(1~3)は口縁部(4~6)は胴部である。(1)は口縁部を外側に折り曲げ内側に段をつくり口唇部を断面三角形に仕上げる。やや左下がりの爪形文をめぐらす。(2)は口唇部をほぼ平坦に仕上げ、左下がりの爪形文をめぐらす。(3)は口縁部外側が肥厚し口唇部にやや丸みをもった面をつくり、その肥厚する部分に継の爪形文、更にその直下にやや左下がりの爪形文をめぐらす。これらの内面及び無文部分はいずれもナデにより仕上げる。

〔前平式土器〕(16~18・21)

口唇部直下に貝殻による連続刺突文をめぐらすもので、内面はナデ外面は斜め方向の条痕により仕上げる。(21)のみ口唇部を平坦におさめる。

〔知覧式土器〕(10~16)

口唇部を平坦に仕上げて浅い刻目を施し、その直下に横位の貝殻刺突線文を4条めぐらす。更にその下に貝殻刺突線文を縦位または幾何学的に施し、楔形突帯文を貼付ける。(10)は口縁部で他は胴部である。いずれも外面の調整は斜方向の貝殻条痕により仕上げる。

〔下剥峰式土器〕(35~38)

口縁部はいずれも内湾するもので桑ノ丸式の形態特徴が見受けられる。(35)の口唇部はややにぶいが(36・37)は平坦におさめる。いずれも口唇部直下より貝殻刺突線文を綾杉状または横位に施す。内面は横方向のケズリにより仕上げる。底部(50)は平底でバケツ状を呈するものとみられる。

〔桑ノ丸式土器〕(39~46)

口縁部はいずれも内湾するもので(35)口唇部をやや丸みをもった面に仕上げ、端部は内傾する。口唇部直下より櫛齒状の原体を羽状もしくは綾杉状に施文する。(45)は一部縱方向の施文が見られる。また(39・44)は文様帶間に3条の貝殻刺突線文を横位にめぐらすもので、下剥峰式の様相が若干見受けられる。

〔手向山式土器〕(47~49)

2条単位の沈線文を外面と口縁部内面に波状に施すもの(47)と、押型文を外面、口唇部とその内面直下に施すもの(49)があり、いずれも口縁部はしなやかに外反する。(48)は浅く間のびする押型文を施すもので、膨らみをもつ胴部から頸部にかけて緩やかに内湾し更に口縁部に向かって緩やかに外反する。

〔平椿式土器〕(62~75)

(74)は肥厚帯を有する口縁部である。他は平椿式の明確な特徴が見られないが、沈線文や刺突文が幾何学的な構成で施されており、平椿式のバリエーションの範疇として捉えた。(73)は壺形土器の頸部とみられ、凹線文により肥厚帯をつくる。

〔塞ノ神式土器〕(77~79)

(78)は口唇部に刻目をめぐらせ、その直下に横位の刺突線文と沈線文を施すもの。(79)は頸部で外反し短くおさめ頸部に横位の凹線文が見られ、椿ノ原式に相当するものとみられる。

〔条痕文土器〕(7~9・19・21~34)

口縁部(22~24)の口唇部はいずれもやや丸みをもって平坦におさめるもので、他の胴部を含めて円筒形を呈するものとみられる。いずれも厚手である。条痕は(22・27・30・32・33)のみほぼ横方向で、他は斜方向である。(7~9)は口唇部を平坦に仕上げ、口唇稜部に二枚貝の背面による押圧文をめぐらすもので、(8・9)は更にその下部に押引きに近い刻目文を縱位にめぐらせ、(7)は刻目文の下部を同原体横位に刻み込むことにより凹線文帯をつくり無文帯とを画している。(19)は口唇部を平坦に仕上げて口唇稜部に貝殻による刻目をめぐらせ、その下部に縱位と横位の貝殻刺突線文を組み合わせて施すことにより窓枠状の文様帯をつくる。石坂式系が含まれるものとみられる。

〔押型文土器〕(51~61・83)

(51~53・58~61)は山形(54~57・83)は楕円押型文である。きわめて薄手の(51)を除き円筒形の器形が想定される。(54・55)は口唇部内面直下に押圧文をめぐらせ更に押型文を施す。

〔縄文土器〕(20)

口唇部はやや丸みをもっておさめ、その直下に丁寧な縄文を施すもので、円筒形の縄文土器とみられる。

〔無文土器〕(80~82)

口縁部(81・82)は端部を細くおさめるもので(80)はいずれかの底部付近である。円筒形を呈するものとみられる。

〔縄文時代後期の土器〕(84~87)

(85)は頸部で僅かに外反するするもので、内傾する口唇部はほぼ平坦に仕上げる。施文は、やや肥厚する口縁部に横位の沈線文、胴部に複雑な構成の沈線文を施す。調整は内外面共に条痕のちナデ。(84)は同一個体の胴部とみられる。(86・87)は口唇部に刻目文をめぐらせ、その下部から頸部にかけて深い沈線文を施すもので、(86)は頸部から口縁端部にかけて緩やかに外反し、端部はやや丸みをもって終わる。(87)は口唇部はほぼ平坦に仕上げる。調整は内外面共に条痕のち一部ナデ。これらはいずれも指宿式もしくは岩崎上層式に相当するものとみられる。

〔石 錄〕(88~105)

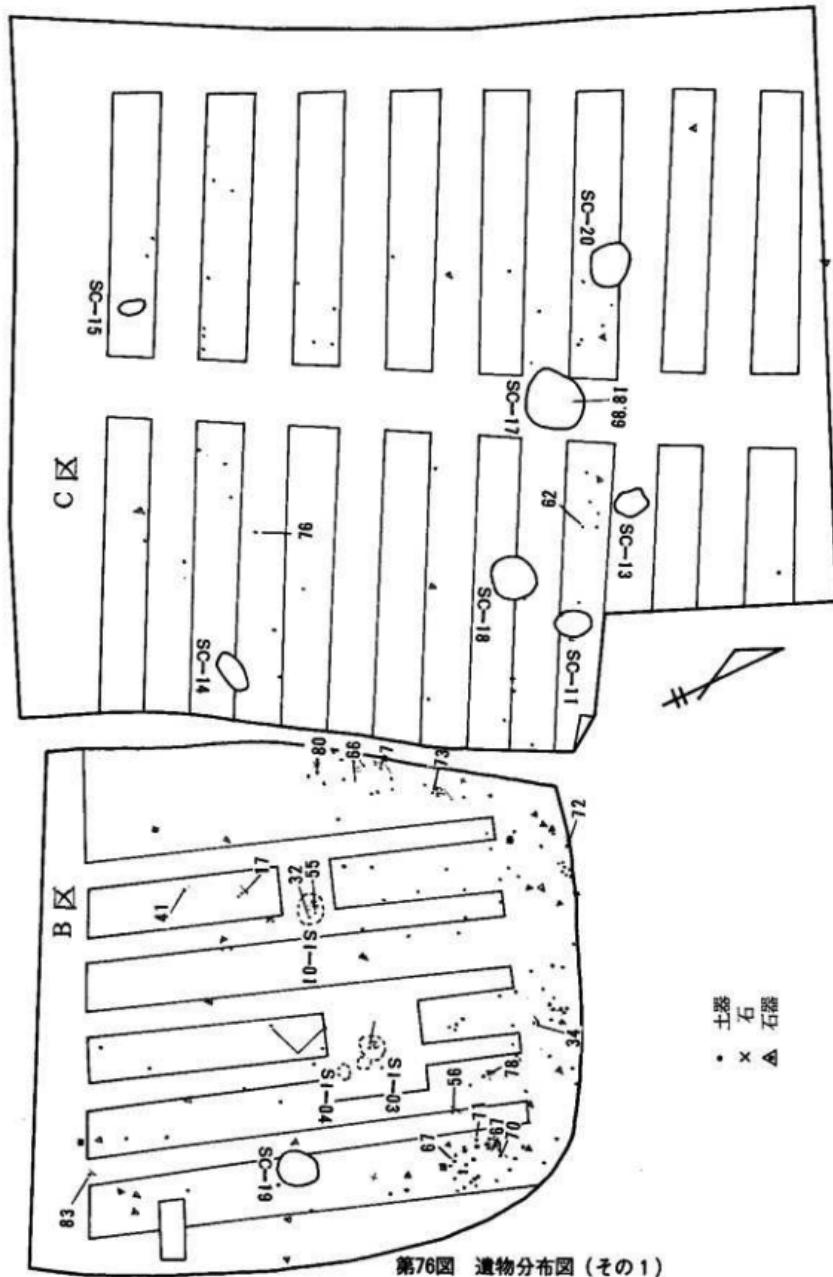
平基無茎録(88)、凹基無茎録(89・102)と剥片録(103・104)がある。凹基無茎録は抉りのきわめて浅いもの(89~92)とやや深いもの(93~96・99・102)、鉢形録(97・98・101)に分けられる。(100)については約1/3を欠損しているため本来の形状は不明。(105・106)は未製品とみられる。(88~91・95・105)は黒曜石製、(98・101・03)は姫島産黒曜石製、(92・94・96・97・100・102・104)はチャート製、他は頁岩製である。

〔石 匙〕(107)

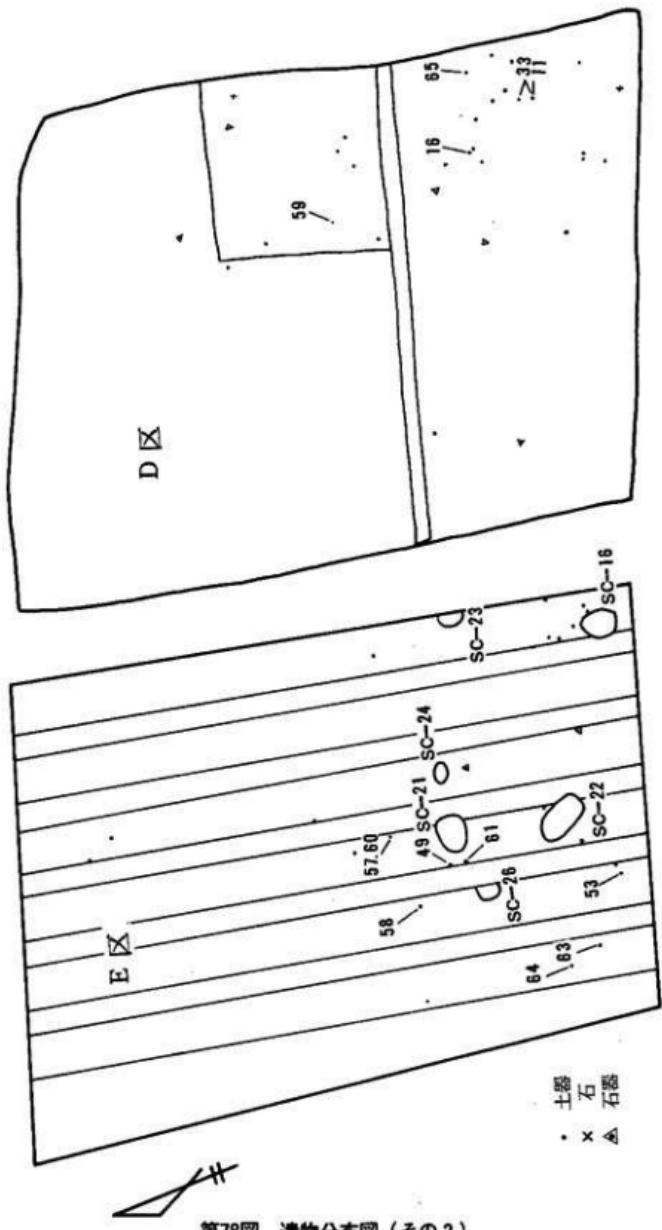
チャート製のきわめて小ぶりの横型石匙で下端部を両面から調整加工し刃部をつくる。一部を欠損している。

〔石 斧〕(108)

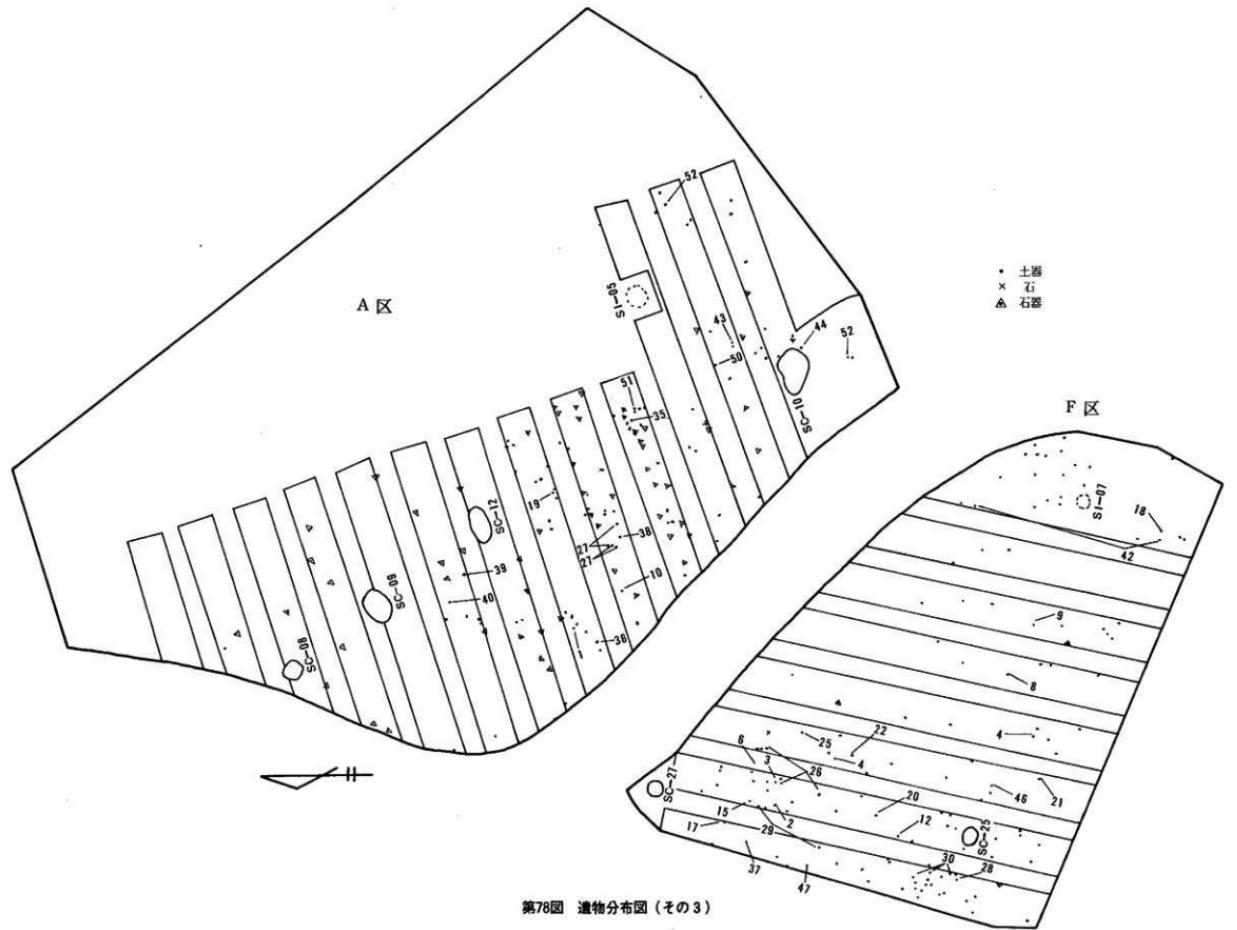
刃部を欠損した局部磨製石斧で、裏面を磨いた後、横方向を剥離と磨きにより成形し、更に表面を求心状に剥離した後、刃部を磨きにより仕上げたもの。表面中央部左側の剥離面は、素材剥片獲得段階のものとみられる。



第76図 遺物分布図（その1）



第78図 遺物分布図（その2）



第78図 遺物分布図（その3）

〔叩き石〕(109)

硬質の砂岩製で両端に使用痕が見られる。僅かに赤変しており、集石遺構等に転用された可能性がある。

〔磨 石〕(110~117)

(110)は凹石で両面に凹部が見られる。(115)は尾鈴山麓産酸性岩類製で、その他は全て硬質砂岩である。いずれも側面に使用痕がある。(115)以外は赤変しており、集石遺構等に転用された可能性がある。

〔石 皿〕(118)

やや硬質の砂岩で、側辺から中央にかけて明瞭な窪みをもつ。赤変しており、集石遺構等に転用された可能性がある。

第4節 まとめ

砂田遺跡は調査の段階で得られた資料から、縄文時代早期と縄文時代後期の複合遺跡であることが判明した。調査区はこの遺跡の中で最も標高の高い部分にあたるため、開墾等による削平をかなり受けしており、とくに縄文時代後期については良好なデータは得られなかった。

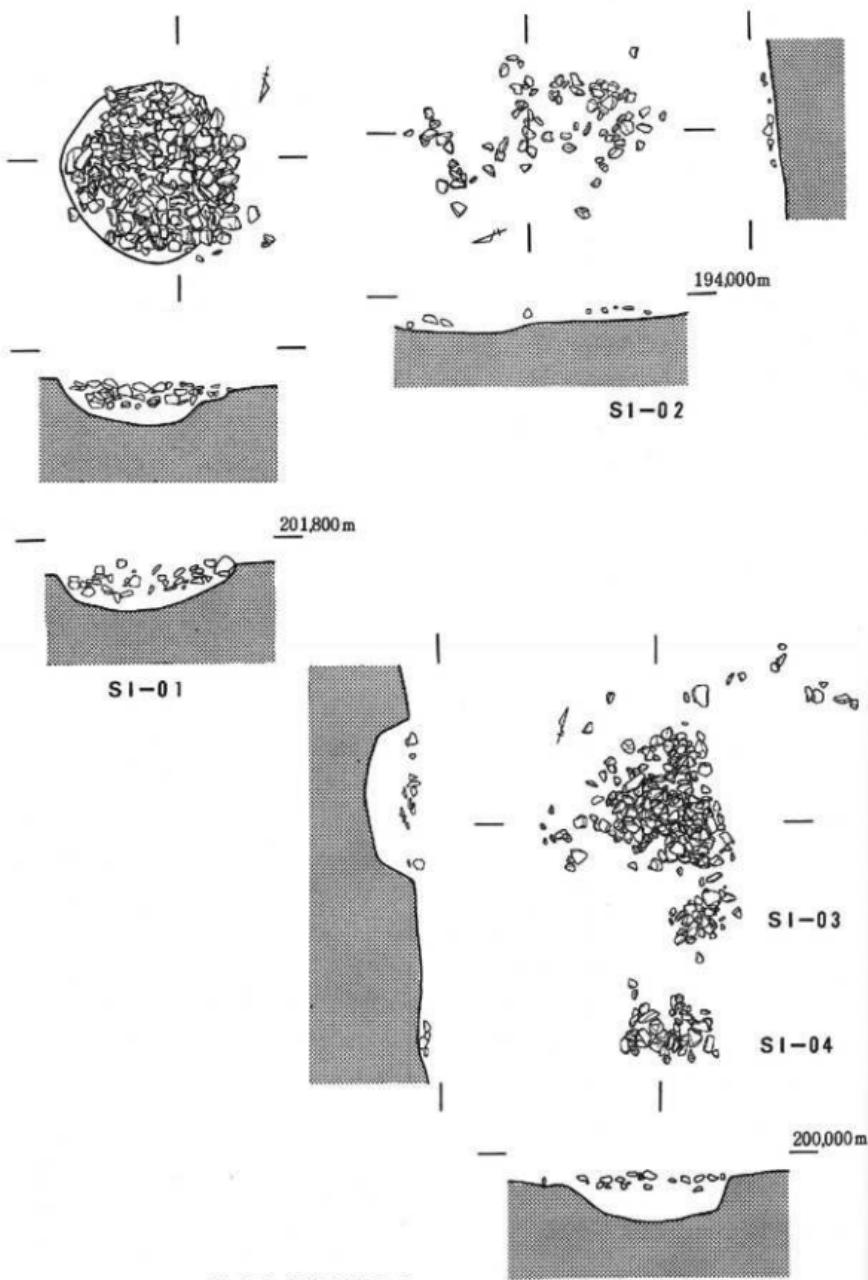
本調査では住居址の存在を確認できなかった。しかし縄文時代早期の土器に前平式、知覧式、下剥峰式、桑ノ丸式、手向山式、平柄式、塞ノ神式などがみられることから、これを時間的な流れとして捉えるならば断続的ではあったにせよ、かなり永きにわたって集落が営まれていたと推測され、この地の諸条件が当時の生活にかなり適していたことを物語っている。集石遺構については土坑を伴うもの、伴わないものとがあり特に密な分布状況はみられなかった。

底面に杭穴状のピットを伴う縄文時代後期の土坑については、類例を調査する時間を得られなかつたが、その構造から狩猟のための落とし穴もしくは貯蔵穴などの用途が考えられる。いずれにせよ、その用途を明確にすることはできれば本遺跡が当時集落であったのか、狩猟場であったのかをある程度推測することが可能である。今後の資料増加を待ち再度検討したい。

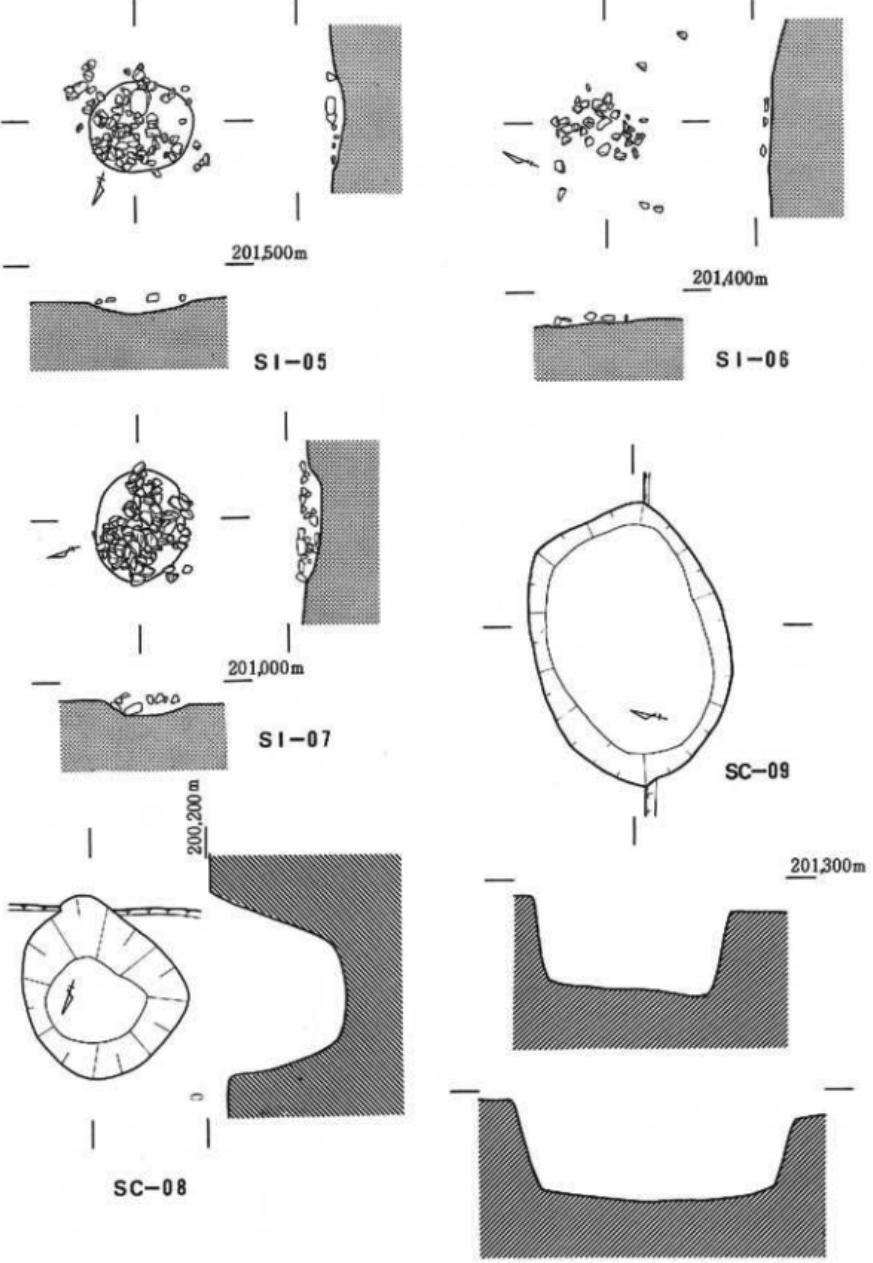
〔参考文献〕

新東晃一「早期九州貝殻文土器様式」縄文土器大観1 1989小学館

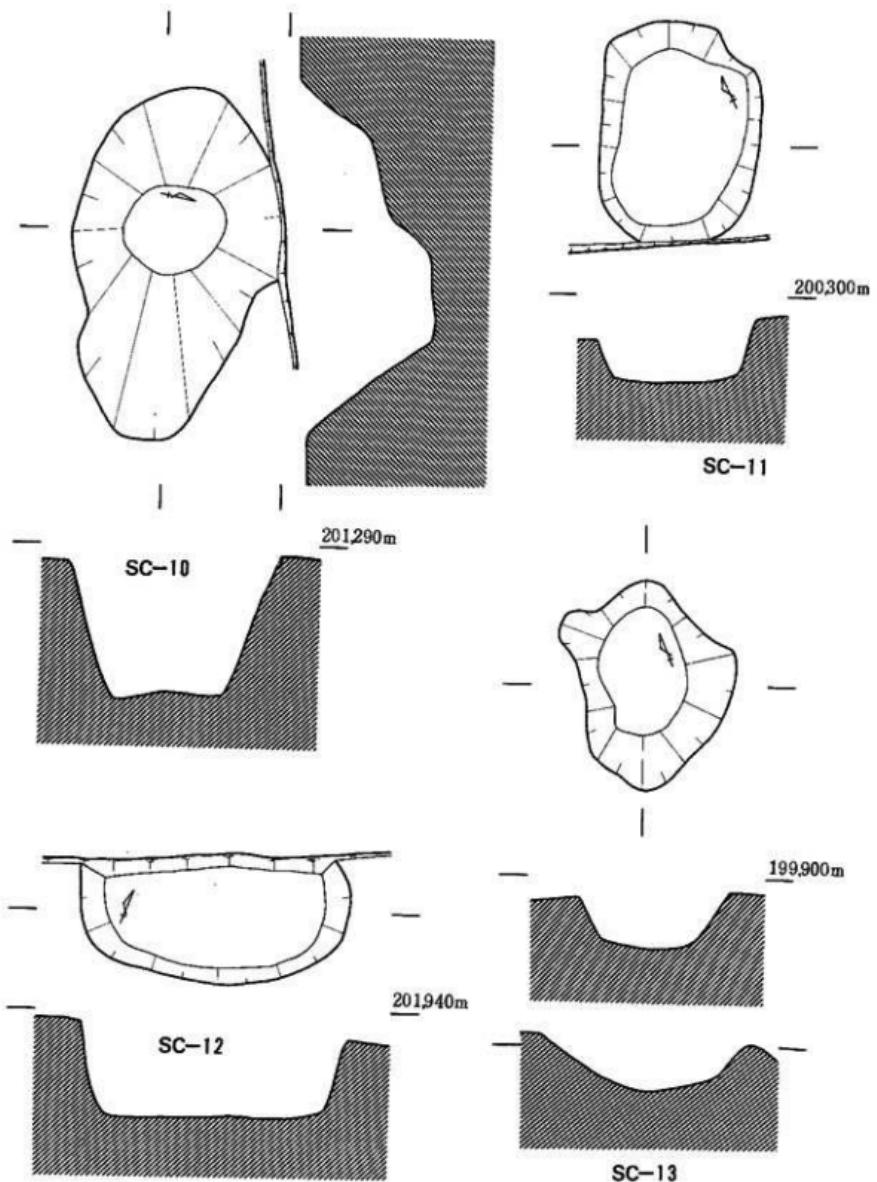
新東晃一「塞ノ神・平柄式土器様式」縄文土器大観1 1989小学館



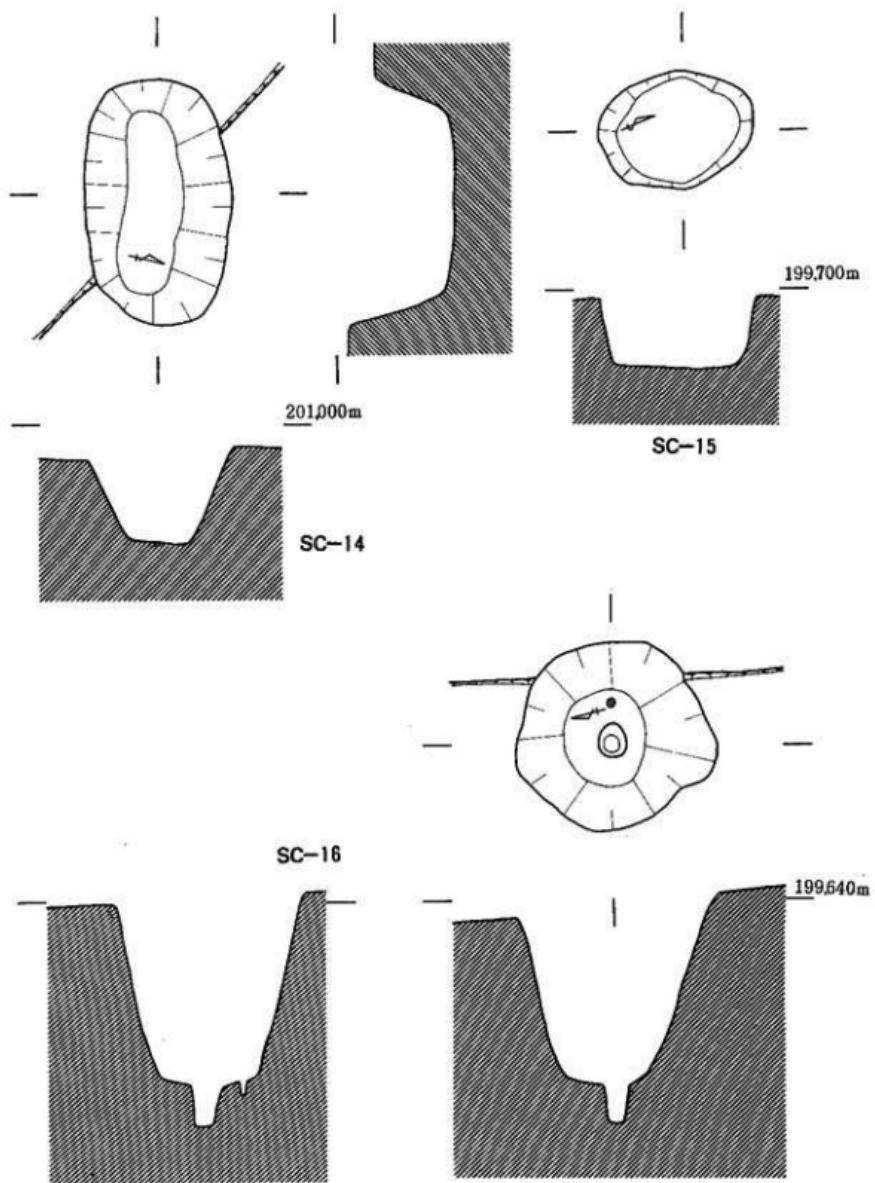
第79図 遺構実測図 (SI-01~04) S=1/40



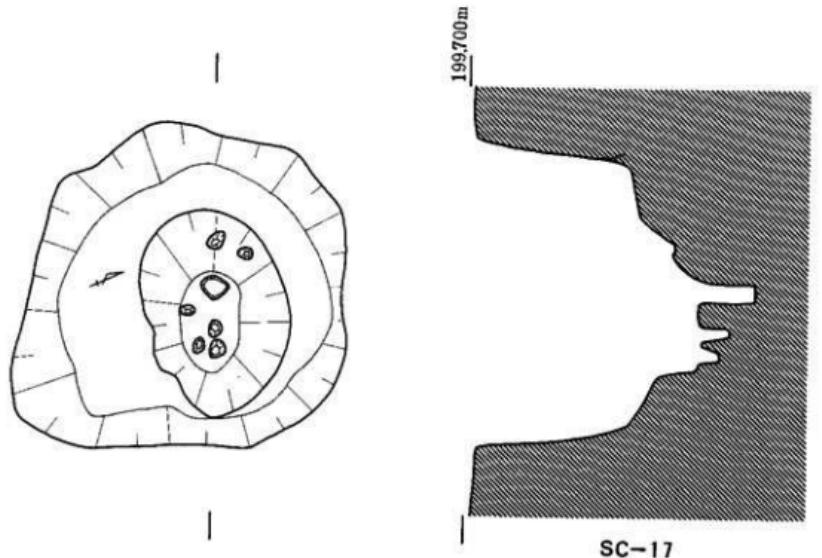
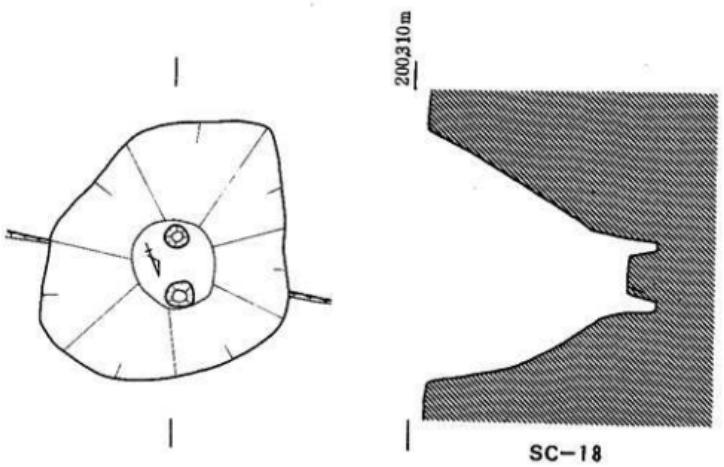
第80図 遺構実測図 (SI-05~07・SC-08・09) S=1/40



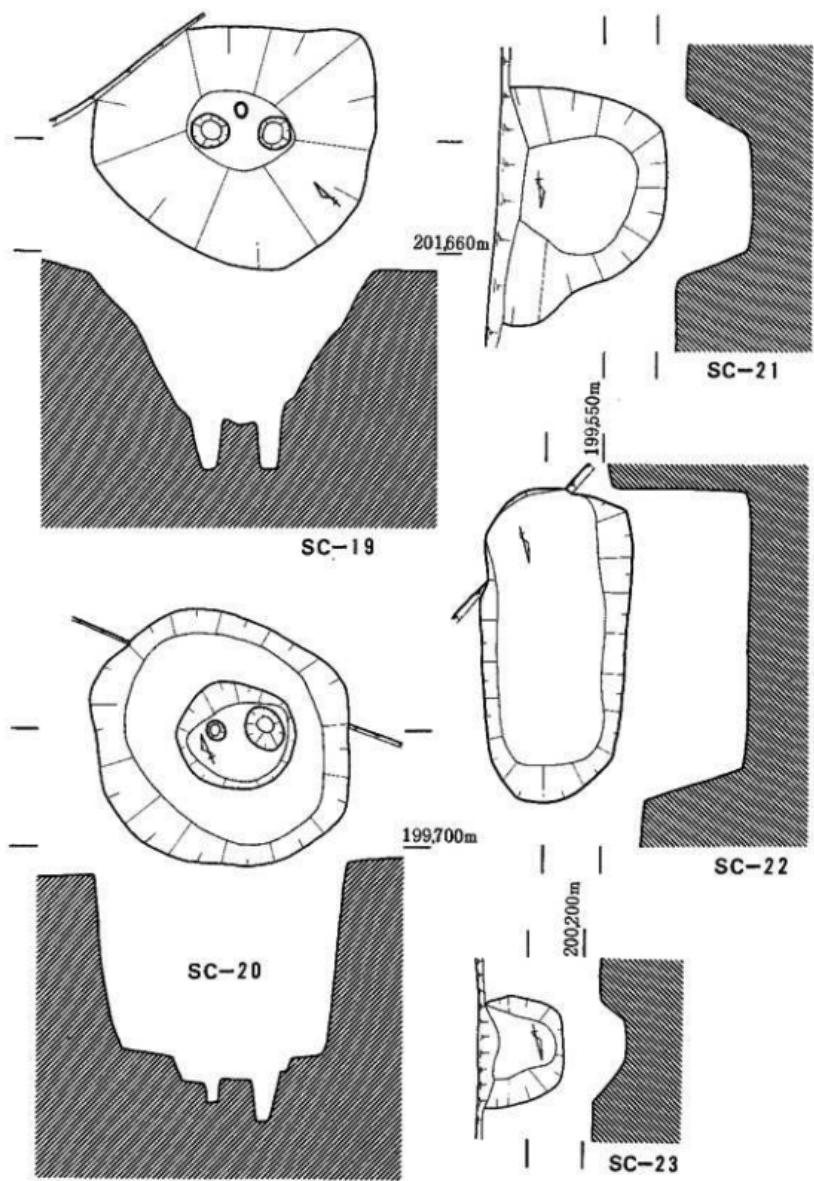
第81図 遺構実測図 (SC-10~13) S=1/40



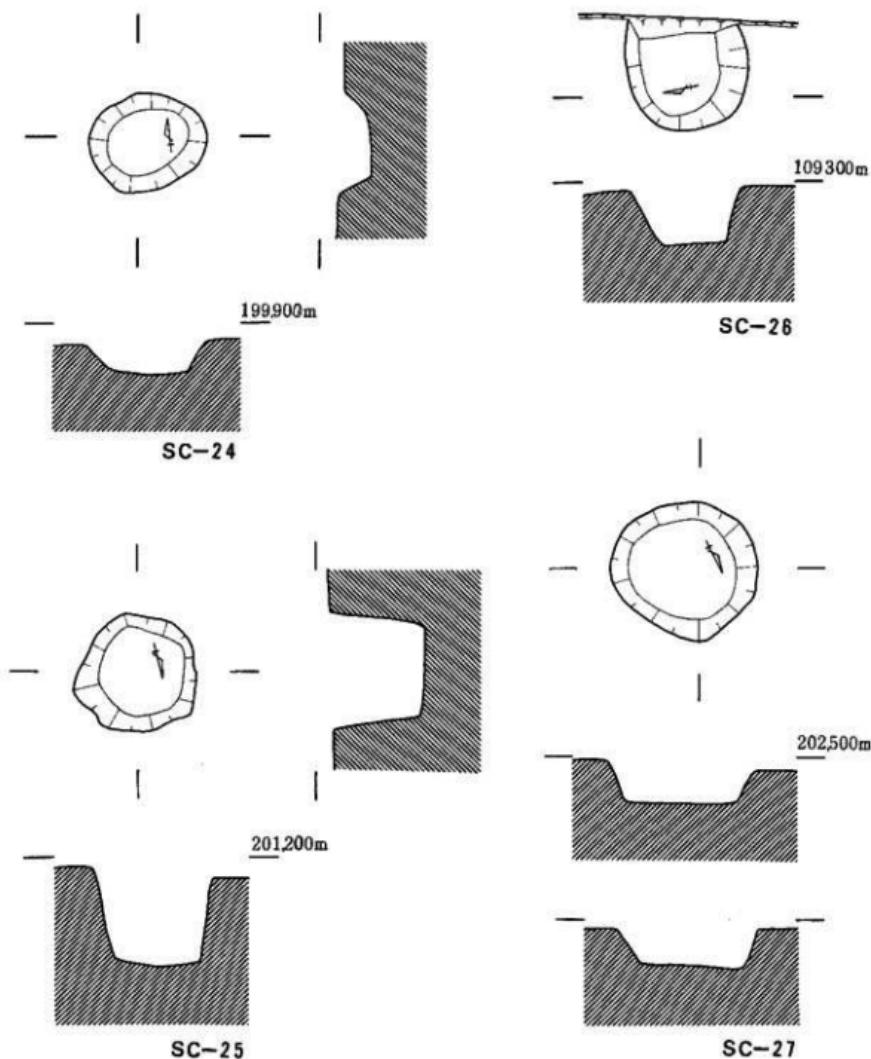
第82図 遺構実測図 (SC-14~16) S = 1/40



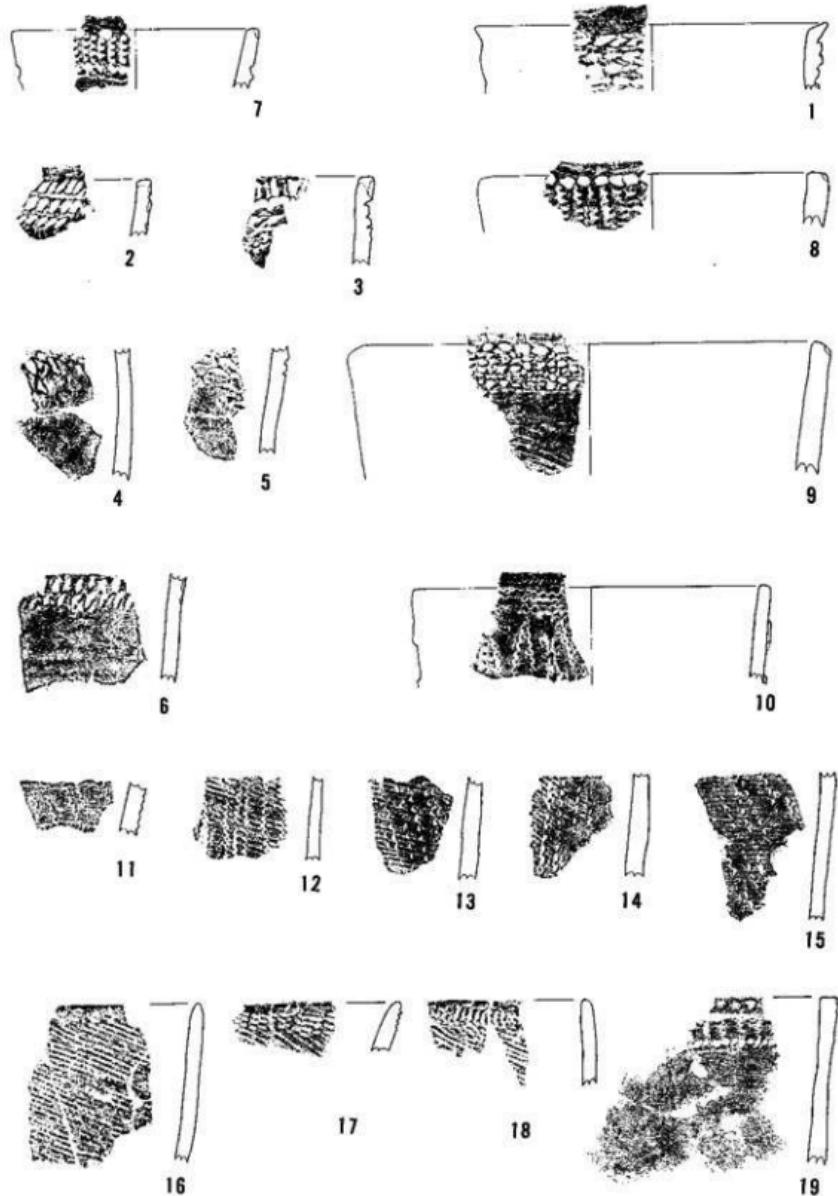
第83図 遺構実測図 (SC-17・18) S=1/40



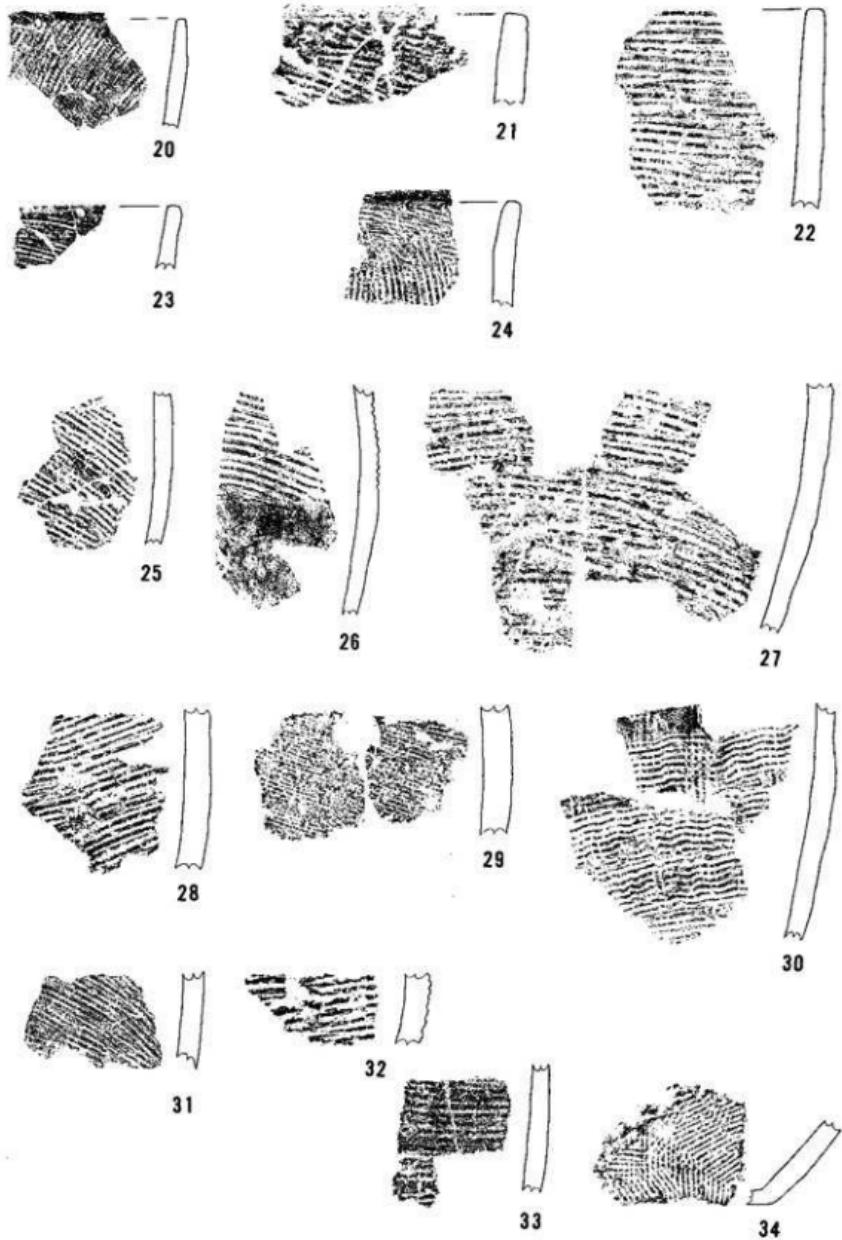
第84図 遺構実測図 (SC-19~23) S=1/40



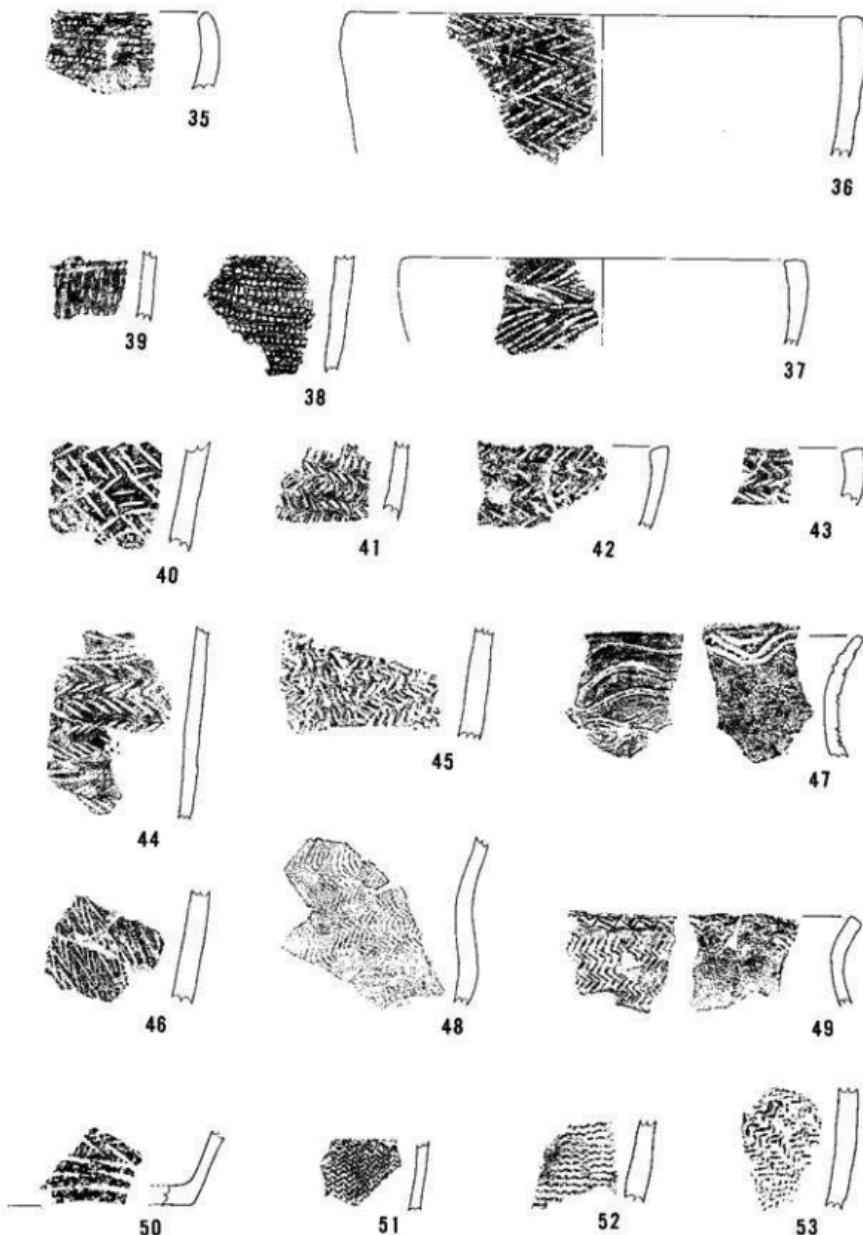
第82図 造構実測図 (SC-14~16) S = 1/40



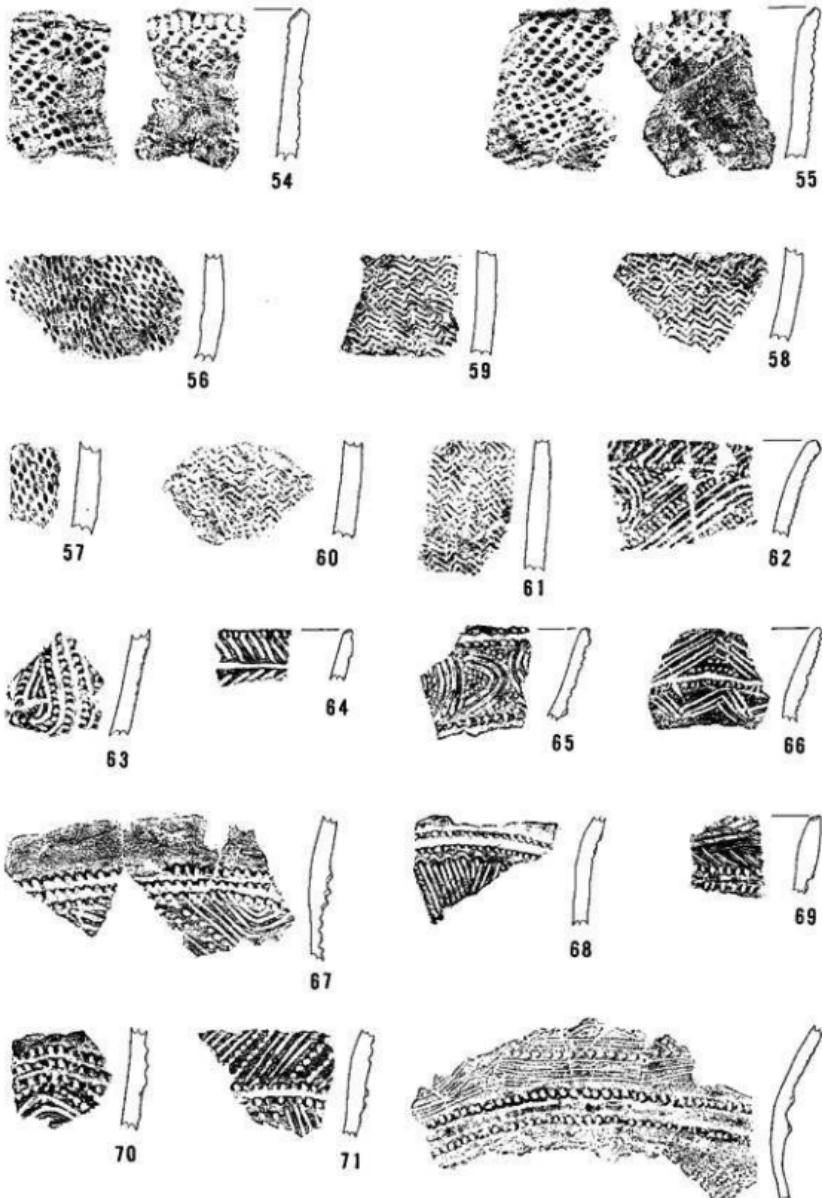
第86図 出土遺物実測図（縄文土器）S = 1 / 3



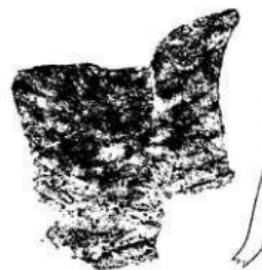
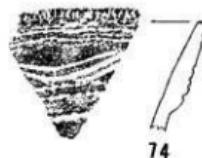
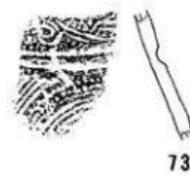
第87図 出土遺物実測図（縄文土器）S = 1 / 3



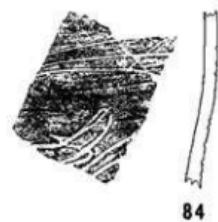
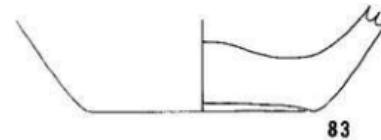
第88図 出土遺物実測図（縄文土器）S = 1/3



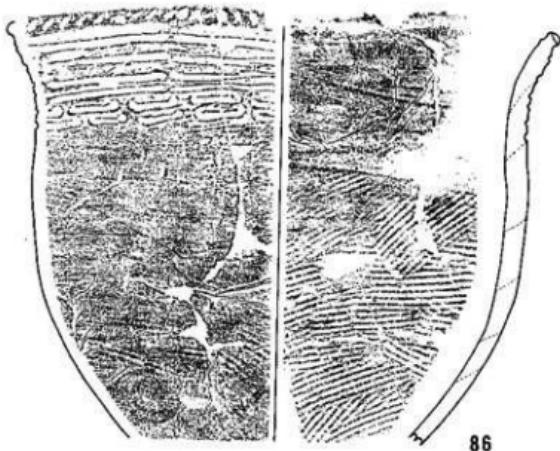
第89図 出土遺物実測図（縄文土器）S = 1 / 3



8



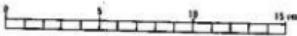
第90図 出土遺物実測図（縄文土器）S = 1 / 3



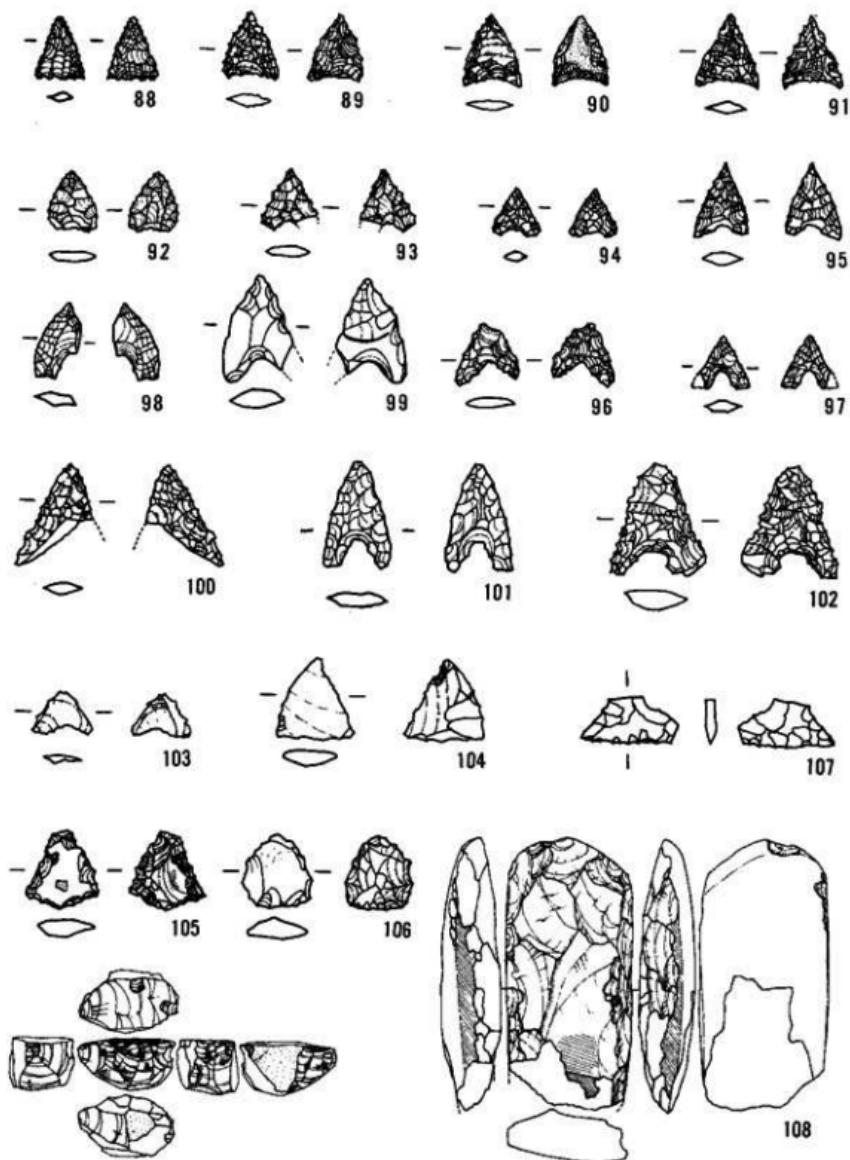
86



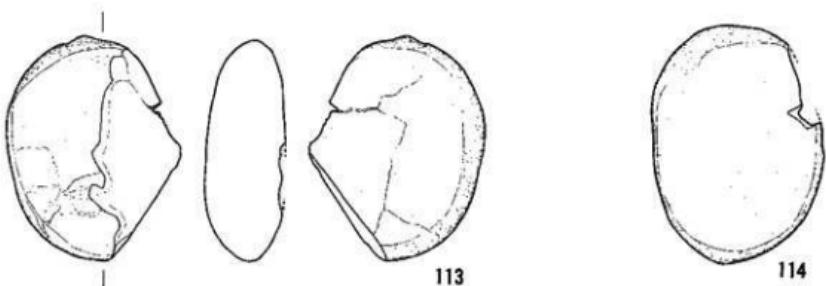
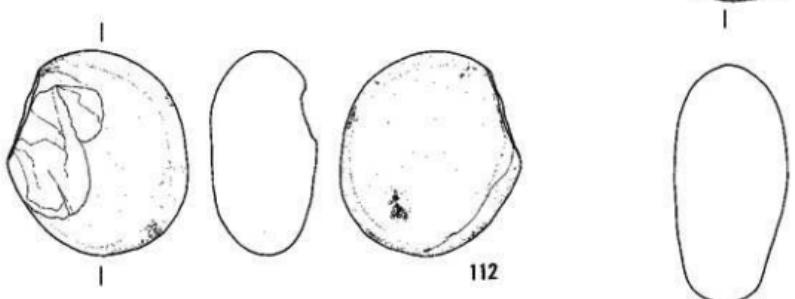
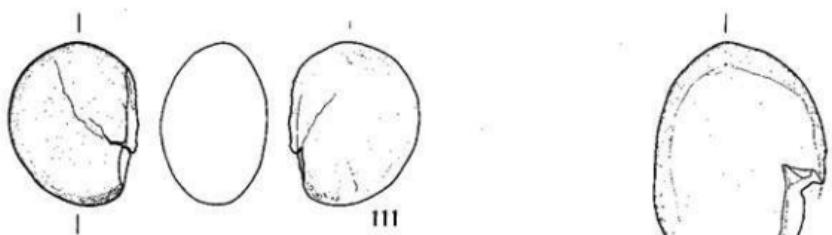
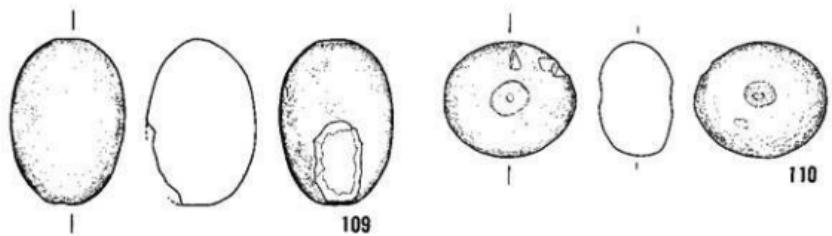
87



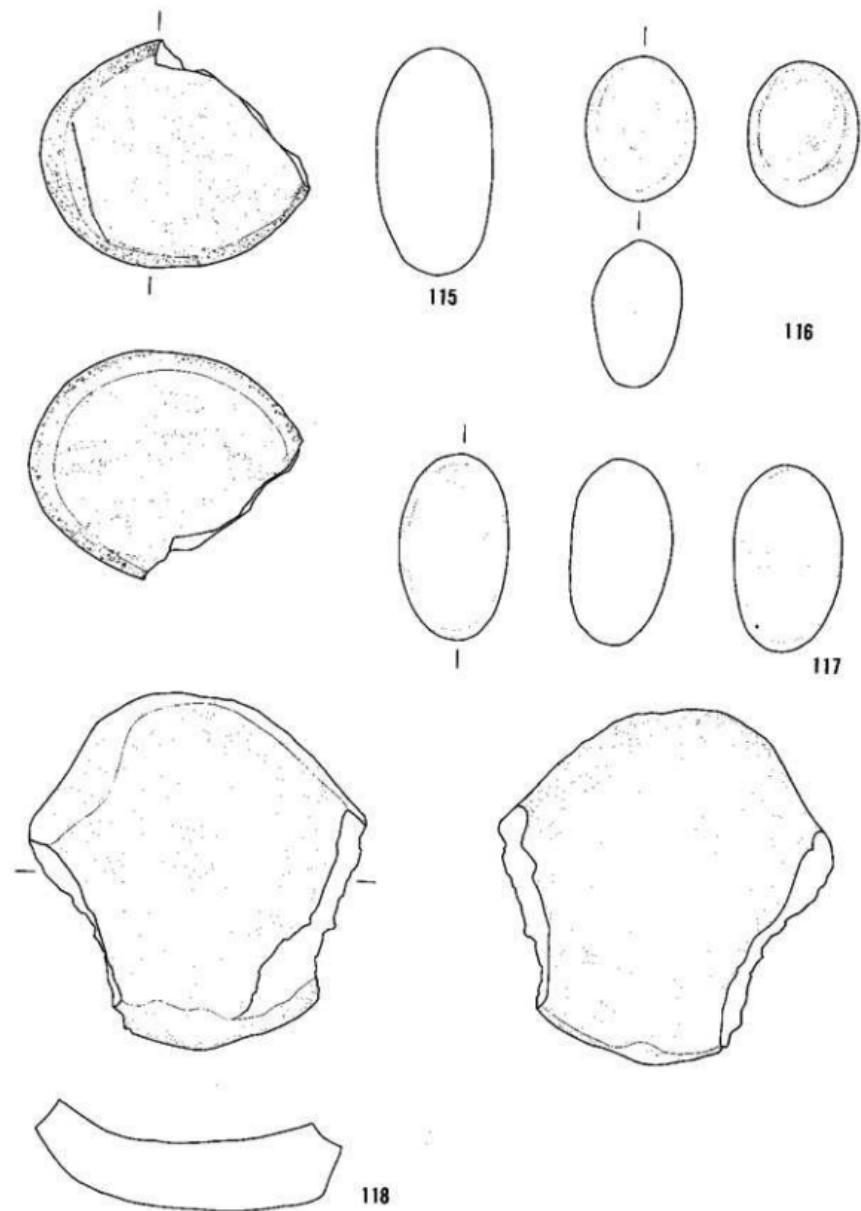
第91図 出土遺物実測図（縄文土器）S = 1/3



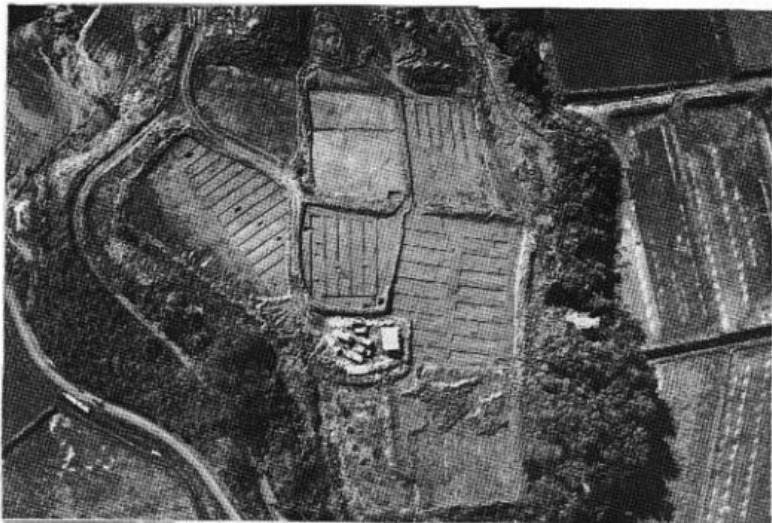
第92図 出土遺物実測図（石器）S = 2 / 3



第93図 出土遺物実測図（石器）S = 2 / 3



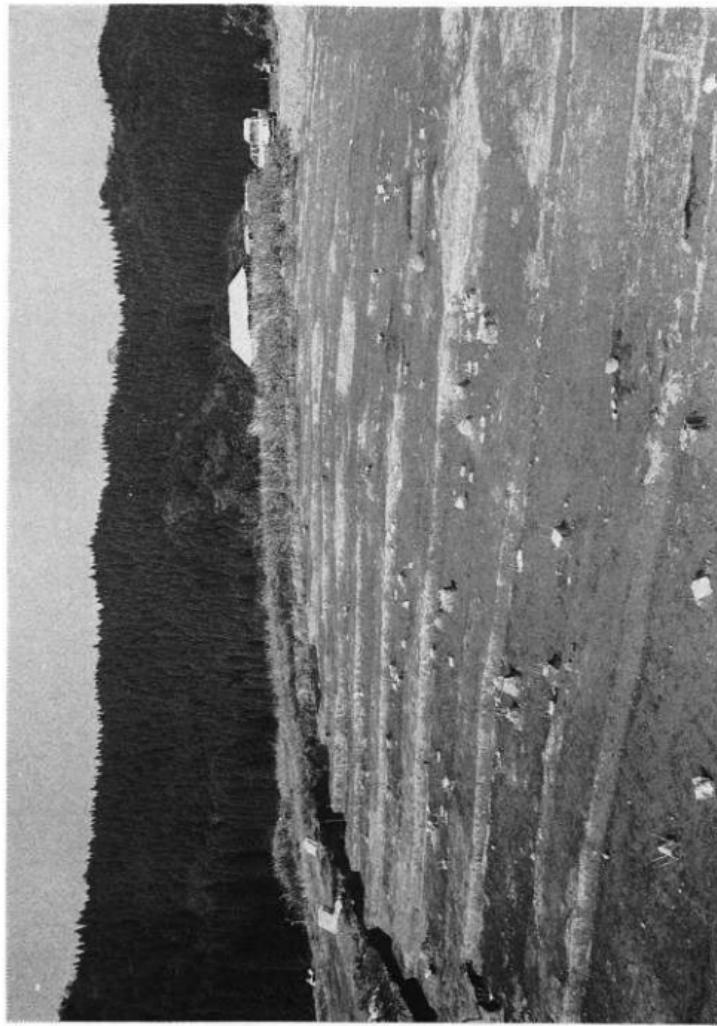
第94図 出土遺物実測図（石器）S = 2/3 (118) のみ 1/6



調査区全景



A区 調査状況（南から）



B区 調査状況（西から）

